

## 創刊の辞

皆さまはじめまして。今日、ようやくこのようにご挨拶することができて、大変うれしく思います。思えば、本誌の企画を始めてから、こうして皆さまのお目にかかるまでに、予想外に時間がかかってしまいました。この点は編集子の不手際であり、深くお詫びするとともに、辛抱強く待っていただいた購読予約者の皆さまに御礼申し上げます。

さて、近年の建築学徒を取り巻く状況を見ると、合同講評会が隆盛を極める一方で、理論や評論といった分野が衰退しているのが目につきます。これは、学生の間に限ったことではないようで、専門誌と呼ばれるものを見ても、その論調は予定調和的か論点がかみ合っていないかのいずれかで、喧々諤々の議論などというものはとうの昔に絶えてしまったようです。

それはなぜだろうかと考えてみても、すぐには答えが出てきそうにありません。建築の抱え込む領域があまりに広大になりすぎたがために用語が混乱しているのかもしれませんが、逆にあまりに多くの領域を失ったがために、私たちの持つ言葉が古典化したのかもしれませんが。いずれにせよ、共通の言語を失ったことは確かであり、それだけに抒情的な、あるいはグラフィカルな表現が一世を風靡しています。近時の学生相手の設計競技で当選したものを通覧すると、説明文は隅に数百字もあればよい方で、中には数行のものもあります。ジュリーもしくはジュリストなる人物（西洋人と思われるが私は面識がない）を招聘して放言を拝聴する合同講評会の隆盛と合わせて、主体的な思考が失われているようで憂慮されます。

しかし、私たちはなにも議論の紐をよじ繰りまわしたいと考えているわけではありません。ただ、もっと実直な実践が評価されるべきであり、学問は堅実に進められるべきだとささやきたいのです。

本誌は、建築と、建築をめぐる営みに焦点をあてたジャーナルです。その中でも特に、そこに息づく人間生活への視座を強く持ってゆきたいという思いから、建築都市文化史誌という副題をつけました。編集を担当する私たちは未熟に過ぎますが、それでも本誌の刊行を発意したのは、後学の徒にながしかの資料を提供できればという考えからです。建築学史上に残るような、偉大な成果を残すことはできないでしょうが、多少なりとも過去を逍遙し、現在の姿を記し、後進のため資を供することは出来ると思います。図書館の地下書庫に眠る、先人達の膨大な成果物を巡ったとき、自身がその上にあることを感じ、また自身もその営みの中にありたいと願いました。

本誌に些かでも建築史に貢献するところのあるよう、編集子一同努力して参ります。購読者の皆さまにおかれましては、どうぞ、末永いご支援を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。

平成 27 年 10 月

明日の建築会

---

# 建築都市文化史誌 aft

## 第1号 目次

---

### Contents

#### はじめに

創刊の辞 明日の建築会……3

#### 論考

吉川清作と乞食の家（1） 落合悠斗……5-16

#### 資料

復刻 現代の住宅 佐藤功一関 / 吉川清作案  
……17-69

#### 記録

明日の建築会のこれまで（1） 赤野一人…  
…70-78

#### 雑報

本会からのお知らせ……79-81  
編集後記…82

#### Introduction

Editor's message……3

#### Contribution

Seisaku Yoshikawa and his works (1) by  
Yuto Ochiai……5-16

#### Reprint

*Modern Housing* (1920) by Koichi Sato &  
Seisaku Yoshikawa……17-69

#### Note

History of ASKEN (1) by Kazuto Akano  
……70-78

#### News

Information from us……79-81  
Editor's note…82

表紙写真：渡邊隆邸内観（渡邊朱美氏提供）

---

aft: Journal of Architecture and Urban Cultural History No.1

Published in Nov. 1<sup>st</sup> 2015 / Edited by Yuto Ochiai / Published by Asuno Kenchiku kai (ASKEN)

1-3-5 Tsunishi, Kamakura, Kanagawa, Japan 248-0034 / Tel: +81-50-3746-9540

E-mail: [asunokenchiku@yahoo.co.jp](mailto:asunokenchiku@yahoo.co.jp) / Website: <https://sites.google.com/site/aftkenchiku/>

Twitter: @asunokenchiku / Printed in Japan / Print edition ISSN 2189-5600

This journal is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 (CC-BY-ND-NC) except following pages: 1(cover), 17-69.

---

## 【論考】吉川清作と乞食の家（1）

落合悠斗

Seisaku Yoshikawa and his works (1) by Yuto Ochiai



晩年の吉川清作氏<sup>1</sup>

*吉川清作のコジキの家は今年度馬鹿の骨頂でしょう。また国会図書館に関する噂が本  
当だとすれば彼の如きは建築家という呼称をやめていただきたい。山口文象<sup>2</sup>*

### はじめに

筆者が吉川清作のことを知ったのは、古い『新建築』誌の中に見つけたこの一文がきっかけであった。当時『新建築』は、毎年末にその年の佳作と、逆に好ましからざる作品を問うアンケートを行っており、この一文は山口文象がそこに寄せたものである。ここで山口は林昌二率いる日建設計や白井晟一の作品も好ましからざるものに挙げているが、中でも吉川に対する批判は「馬鹿の骨頂」と手厳しく、更に「建築家という呼称をやめていただきたい」とまで述べている。他にも同アンケートでは小川正<sup>3</sup>が吉川の乞食の家について「限界を超えたローコスト」と批判的に取り上げている。

いったい、この吉川清作とは何者なのであろう

か。同アンケートに出てくる他の名前に、丹下健三や前川國男、村野藤吾、池辺陽、増沢恂など、今日でもなお知られているビッグネームが多いのに比べて、吉川の名前は寡聞にして聞かない。

そしてなぜ、吉川清作という人はここまで否定されなければならなかったのだろうか。そして遂には作品への批判という枠を超えて、建築家失格の烙印さえ押されている。彼に一体、何があったのだろうか。

筆者は、以上のような点から兼ねてよりこの人物に興味を持ち調査を行ってきた（その成果の一部は明日の建築会第3回グループ展「建築する精神—吉川清作と乞食の家—」<sup>4</sup>で活用された）。本レポートはその総括となる報告である。後述するように、

<sup>1</sup> 吉川清子さん提供。

<sup>2</sup> 『新建築』第30巻12号(1955年12月号), p.65

<sup>3</sup> 小川正（おがわただし、1912-2000）早稲田大学卒、竹中工務店大阪本店設計部長を経て同顧問となる。

<http://www.takenaka.co.jp/design/architect/14/>, 2015年8月13日閲覧。

<sup>4</sup> 2014年11月1-2日、早稲田大学西早稲田キャンパス中庭にて開催。本展については、本誌にて後日報告されることと

吉川清作については既往研究も少なく、まとまった記述としては(特に戦後の作品については)、本レポートが初めてのものになる。出来るだけ書き漏らしの無いよう丁寧な叙述をするつもりなので、幾分長くなるかもしれないが、よろしくお付き合い願いたい。<sup>5</sup>

## 研究の射程

まず、形式上、この研究のもつ射程を述べなければならないが、話は著名建築家研究のように簡単ではない。というのも、吉川清作という人物は、これまでごく一部の人間を除いて知られるところのなかった人物であり、十分な資料が存在しないためである。付随して、これまでの彼の作品に対する評価も必ずしも高いものではなく、先の山口の文章にもあるように、晩年の作品には建築界から否定的な扱いをもされてきた。それでもなお、吉川清作という人物について論じようとするのは、このような建築思潮の中心にいなかった人物を語ることが往時の建築界を正しくとらえる上で必要だと考えるからである。どういうことか。

建築が総合的な営みであるからには、そこには有形無形の形で実に多くの人が関わってくる。また、その関わり方も多様である。単純に設計者と言っても、設計者の中にも雑誌に大きく名前が出る建築家もいれば、小さくしか出ない事務所属員もいるし、そもそも載らない外部のドラフトマンもいる。そもそ

も、その組織規模も、小は数人から大は数千人まで様々であり、形態も、独立した設計事務所もあれば、施工と一体化した工務店・ゼネコンもあり、公官庁もありと様々である。また、施工者やメーカーであっても、技術協力その他の形で、設計に関与することがある。

しかしながら、これまでの研究では、ややもすれば建築計画史となり、このような広がりをつまみ取られていなかったのではなかろうか<sup>6</sup>。特に実際の建築設計における多くを担ってきた、中小の設計事務所、工務店、ハウスメーカーの仕事については、評価を下すことに成功していないばかりか、その方法さえ見えていないというのが実情ではなかろうか(それは、例えば、今日の東京に広がる小住宅群について、史的というより文学的・感性的観点からの評価が先行せざるを得ない<sup>7</sup>点に特徴的に表れている)。都市に広がる無数の無名の(しかし「匿名」ではない<sup>8</sup>)個々の仕事に対して、私たちはもっと真摯に向き合うべきである。それらは確かに、芸術的に優れているとは言えず、あるいは有名建築家のコピーに過ぎないのかもしれない。あるいは資本主義経済下の産物(商品)に過ぎないのかもしれない。しかしながら、そのような建物こそが、実際の都市を形作ってきたのである。吉川清作もその一人であった。

そして、恐らく彼は、建築家なら誰しもがそうであるように、建築思潮の先端にありたいと願いながら、叶わなかった作家のひとりでもあった<sup>9</sup>。しかし、

---

思う。

<sup>5</sup> なお、資料の引用にあたっては、本文中ではわかり易さを旨として、適宜、旧字体・歴史的仮名遣いを新字体・現代仮名遣いに直していることをあらかじめご了承願いたい。

<sup>6</sup> この言い方は鈴木博之「都市の所有者たち」『近代建築論講義』東京大学出版会、2009、p.189より借りをた。

<sup>7</sup> 例えば「乾久美子+東京藝術大学乾久美子研究室展—小さな風景からの学び」(2014年4月18日(金)~6月21日(土) TOTO ギャラリー間)にて示されたようなア

プローチ。

<sup>8</sup> 匿名とは「実名をかくして知らせないこと」、無名とは「(第三義)世間に名の知られていないこと」(ともに広辞苑第五版)。前者は能動的なニュアンスを持つが、後者は違う。現実にある殆どの建物は、ただ知られていないだけである。

<sup>9</sup> 吉川の建築思潮への意欲は、戦前は、低廉な新婚住宅の提唱において、戦後は乞食の家の試作提示において表れている。

建築思潮の先端にあれなかったからといって、無価値というわけではない、むしろ逆である。「敗者（とはいえ相対的な名称なので、悪い意味ではない）によって構築される論理は、けっして強くはない。他を圧倒せず、その意味では時代を牽引しないのかもしれないけれど、堅実にしぶとく存在し続ける」<sup>10</sup>からだ。

このような意図から、著名ではないが、しかし確かに市井に生きた建築家・吉川清作とその作品について見てゆくことにしたい<sup>11</sup>。

---

<sup>10</sup> 横手義洋「近代の建築史と建築論」『近代建築論講義』東京大学出版会、2009、p.37

<sup>11</sup> もっと長々と述べると、本研究の射程は、設計者の有名無名もしくは個人非個人を問わず、すなわち個人設計事務所も組織設計事務所もそれ以外も同列に扱えるような観点を見出すことを見据えている。現状において、これらの目指すところの乖離は回収不可能なほど大きい。建築設計組織の理想的な形を巡っては、過去に浜口隆一・村松貞次郎によるルポタージュ（「ルポタージュ・設計組織を探る」『新建築』1961年11月号～1962年5月号）や、神代雄一郎らによるいわゆる巨大建築論争（1974）の中で議論が展開されたことがあるが、いずれの場合も有意義な一致をみなかったことからしても、この問題は単なる組織論で解決するものではなく、そもそもの価値観から異なるらしいと理解できる。建築設計技術者という名称に共感できるか否かという、日本で建築教育が始まって以来の例のアポリアも同じところに帰結するだろう。これを克服するためには、どんな建築にも（歴史的にも芸術的にもお世辞にも優れているとは言えない、有名建築家の劣化コピー、あるいは商品化住宅でさえも）カバーできる観点を見出さねばならない。それは、建築史学とは、建築を対象とする歴史学であり、どんな建物でさえも語るに足るということを、再確認することで達せられる。すなわち、どのような建物であろうとも、本来的には取り上げられるに値する史的価値を有している。それは後天的には、その建物の利用者と、その地域の人の記憶によって付与されるのである\*が、その前に、先天的には、設計者以下建築生産に携わった人によって与えられている。そして、前者が記憶によってその価値を与える一方で、後者が価値を与えるのは彼の矜

## 先行研究について

吉川清作についての既往研究は少ない。まとまったものとしては、唯一、本橋仁による村山知義・合理派建築会研究<sup>12</sup>の中で触れられたものが存在するのみである。これは、村山知義の建築活動を主題としたものであり、吉川は村山知義らの結成した合理派建築会のメンバーとして登場する。戦前の吉川と芸術界の関わりについて詳述されており、参考となるとところが極めて大きい。本連載においても度々参照する。

一方で、戦後の吉川の活動については、これまでの研究では明らかにされていない。

持による。筆者がこのように言うのは、前述したように建築生産に携わる人間は実に多様であり、彼らの目指すところは必ずしも一致をみない以上、唯一、両者が一致を見ることが有るとすれば、それは恐らく彼の価値観ではなく、建築への矜持であろうと考えるからである。全ての建物の先天的な史的価値は、恐らくその一点に於いてのみ共通に語られうる。そしてここで一番重要なことは、それが建築思潮の先端にあるかは問題とされないことである。この場合にはじめて、時代も地域も超えて、建築を同列に語りうるだろう。本レポートは、以上のような予測に基づいた叙述作業の手始めとして記述されている。

\*このように、学術的な価値判断とは別に、地域に固有の文脈に基づいて建築に価値を認めようとする取り組みに「なかなか遺産」がある（村松伸「なかなか遺産とそこそこ保全」建築ジャーナル 2015年8月号 no.1241 p.21、公式サイト <http://nakanakaisan.org/>）。この究極的な形として、藤森照信は個人を基準として保存に取り組み「マイ世界遺産」を提唱している（「建築保存の意義」『近代建築論講義』東京大学出版会、2009、p.135）。文化庁が近年始めた、地域の文化財群にストーリーを設けて、そのストーリーを認定する「日本遺産」の取り組みも、従来の学術的な価値判断とは離れたという点で、やや近いかもしれない。

<sup>12</sup> 本橋仁、中谷礼仁「建築イデオロギーの意識的拡張：村山知義と合理派建築会について」『学術講演梗概集、F-2、建築歴史・意匠』日本建築学会、2009、pp.229-230、本橋仁『建築イデオロギーの意識的拡張—村山知義と合理派建築会—』早稲田大学建築学科卒業論文、n.d.

## 吉川清作という人

さて、形式上必要なことは書いたのですが、これからようやく、本題である吉川清作の生涯と作品を巡る旅へ出発するわけであるが、その前に、本研究にあたってお話を伺ったお二人をご紹介します。まずお一人目は、吉川清作の三男、敏夫氏の夫人である吉川清子さんである。お二人目は、吉川清作のクライアントであった渡邊隆氏の御令嬢で、吉川清作を戦前から知る渡邊朱美さんである。吉川清作の出自や人となりについて、出典を明記しない部分は、このお二人へのインタビューに基づいている。<sup>13</sup>

<sup>13</sup> 吉川清子さんへのインタビューは2014年12月6日、2015年1月30日の2回、渡邊朱美さんへのインタビューは2014年11月28日、2014年12月2日、2015年1月30日の3回、いずれも御自宅に伺って行った。

<sup>14</sup> 墓誌による。本橋 p.41 では、1934年の朝日新聞の記事中の「当年39歳」を基に生年を1895年と推定しており、墓誌と1年の差があるが、これは記事の表記が数え年であったために起きた食い違いであろう。

<sup>15</sup> 「輝く金の・1万円 東京市庁舎設計当選発表」朝日新聞（朝刊）1934年6月2日 p.11。吉川に関する部分を抜き書きする。「二等に当選した吉川清作氏は一昨年本社で募集した朝日村住宅設計に一等を取った建築家、石川県石川郡御手洗村字相川新の出身、兵庫県立神戸工業を二年で中途退学、十年程前には曾根中條建築事務所に勤めていたことがあるが、その後放浪の生活を好み、この五月末日までは鎌倉材木座の別荘番をしていた変わり者、一日発表を待って上京日本橋通二丁目の酒場グラスに居候して飲みたくなると下に降りてくる当年三十九歳の独身者、酒場の二階に訪ねると「二等とは残念、当然一等になると確信していましたが、一等が余程良かったものと見えます、僕のパトロンはグラスの女将です、一割の一千円を進呈するはずのところ三百円だけ差し上げるのがすくなくなりました」そばから女将が口を出す「この前に懸賞で千五百円取った時この人は一晩で飲んでまた元の貧乏になったんですよ、今度も案じられます」

<sup>16</sup> このことについては、読売新聞（「新市庁舎設計当選者決る」読売新聞（朝刊）1934年6月2日 p.7）と前掲朝日新聞記事において言及されている。前者には「兵庫

生まれから独立まで

吉川清作は1896年2月7日<sup>14</sup>、石川県石川郡御手洗村字相川新（現在の石川県白山市）に生まれた<sup>15</sup>。生家は農家で、村の中では二番目の地位にあった。経済的にも裕福であったが、何らかの事情により一家が離散し、清作は神戸に移住した。この間の学歴は明らかではないが、1912年（16歳）頃<sup>16</sup>には、兵庫県立工業学校（現在の兵庫県立兵庫工業高校・神戸工業高校）に入学した。県立工業学校には昼間部の他に夜間部があり、建築科、機械科、電気科の3科が置かれていた<sup>17</sup>。旧制工業学校は、14歳から入学できた<sup>18</sup>から、吉川の場合は最短より2年程間があったことになる。吉川清子さんのお話によ

県立工業に入ったが十九の時つまらなさと辞めて」とあり、後者には「兵庫県立神戸工業を二年で中途退学」とある。まず、吉川が工業学校を辞めた年は記事と生年を照らし合わせて1914年2月～翌年1月であることがわかるが、入学年については上の記事からは明確に特定できない。後者の記事中の「二年で中途退学」を一番純粋に考えると、1912年の春に入学し、1914年の3月（2年生の終わり）に辞めたというのがもっとも理解しやすいが、第二の可能性として1913年の春に入学し、1914年4月～翌1月にかけての2年生かつ19歳の間に辞めたということも考えられる。どちらが正しいかは上記資料中からは判断できないが、とりあえずシンプルな方を取って1912年頃とした。なお、朝日記事は学校名を「兵庫県立神戸工業」としているが、そのような名前の学校はこの当時存在していなかった（神戸工業とつく学校は、1941年に兵庫県立工業学校が第一神戸工業学校と改称されたものが最初）。恐らく当時から、兵庫県立工業学校を神戸工業と呼ぶことがあったのだろう。これに関連して、本橋 p.41 では吉川の在学した学校を「兵庫県立神戸高校」と紹介しているが、これは朝日記事を誤写したことによる誤り。

<sup>17</sup> 兵庫県立兵庫工業高等学校沿革（<http://www.hyogo-c.ed.jp/~hyogo-ths/intro/history.html>）2015年8月23日閲覧。

<sup>18</sup> 工業学校規定（明治三十二年二月二十五日文部省令第八号）第四条「工業学校ニ入学スル者ノ資格ハ年齢十四年以上学力修業年限四箇年ノ高等学校卒業又ハ之ト同等以上トス但外国語ヲ試験科目ニ加フルコトヲ得」

ると、吉川清作は神戸時代、働きながら勉強していたということであるから、恐らく夜間部の建築科へ入学したのだろう。しかし、吉川は2年で中途退学してしまう。その理由についてはつまらなかったからだと読売新聞の記事<sup>19</sup>は伝えているが、実際には、ちょうど在学中の1913年（大正2年）に修了年限がそれまでの2年から、予科1年・本科2年の計3年に延長された<sup>20</sup>ことも影響しているのだろう。

1914年、18歳の時に工業学校を辞めた吉川は、上京し曾根中條建築事務所へ10年程勤務する。しかし「その間何度も首が飛んだり繋がったり殆ど独学で叩きあげ気が向かなければ仕事をしない」<sup>21</sup>といった様子であった。もっとも、この時期は建築家としての技量を磨いたという以上に、吉川にとって重要な出会いがあった時期である。仕事の上では、その後協働する村山知義を知ったであろう<sup>22</sup>こと、個人的には後に夫人となる<sup>23</sup>飯尾楠美代さんと出会ったことである。この頃は旧下谷区下谷龍泉寺町にある楠美代さんの実家に同居していた<sup>24</sup>が、長男の晴夫さんが誕生した頃（1925年頃）に本郷区駒込林町105<sup>25</sup>（現在の東京都文京区千駄木3丁目26付

近）へ移住した。同時期より、雑誌に個人名で作品を発表するようになる（個々の作品については後述）。この間に次男の康夫さんも生まれ<sup>26</sup>、家族は五人となっていたが、吉川自身は放浪を好み、1934年5月には神奈川県鎌倉市材木座にて別荘番をしていた<sup>27</sup>。同年6月に東京市庁舎コンペに二等入選した時には、日本橋通り2の1にあった銀座のバー・グラウスの深川久子さんのところへ転がり込んでおり、その後忽然と失踪するが、同年の12月に、鶴見の高台に自邸を新築し、家族を呼び寄せ移り住んだ<sup>28</sup>。

曾根中條建築事務所を辞してから鶴見に移住するまでの間には、きちんとした設計事務所を構えていた様子はない。恐らくその時々で図面を引いていたのだろう。鶴見に移住してから戦前までは、自宅を事務所として仕事をしていたようである<sup>29</sup>。また、近くに小さなアトリエ（小屋）を持っており、そこに一人で籠っていることもあった<sup>30</sup>。戦時中はその周りに畑を作り、カボチャなどを育てていた。自身の設計事務所として都市建築研究所の名前が確認されるのは、1950年になってからである<sup>31</sup>。

<sup>19</sup> 「新市庁舎設計当選者決る」読売新聞（朝刊）1934年6月2日 p.7。以下、吉川に関する部分を抜き書きする。「二等の吉川清作君（三九）は、楽天的な天才肌の設計家、石川県生まれで兵庫県立工業に入ったが十九の時つまらないと辞めて東京に飛び出し曾根中條建築事務所に十年程つとめたがその間何度も首が飛んだり繋がったり殆ど独学で叩きあげ気が向かなければ仕事をしない、でも大正十五年にはジュネーヴの国際連盟会館の設計に日本から応募した三人のうちの一人だった、今もこれという仕事も持たず日本橋通り二ノーバークラウスのマダム深川久子さんのところへ転げ込んでいる、かつて一等当選の一千三百円を一晩で飲んでしまったという無軌道家だ。」

<sup>20</sup> 兵庫県立兵庫工業高等学校沿革（前掲）

<sup>21</sup> 読売新聞記事（前掲）

<sup>22</sup> 曾根中條事務所がバラック装飾社の代表作「カフェキリン」を手掛けていたことからの推定。本橋 p.42。

<sup>23</sup> 正確に何年かは御遺族の方に聞きそびれた。あまり本論に関係ないし、故人のプライバシーの範疇に入るので

気にされないで頂きたい。

<sup>24</sup> この頃に長女・清美さんが生まれている（1922年）。

<sup>25</sup> 『朝日住宅図案集』朝日新聞社、1929、目次頁に記載の住所より。

<sup>26</sup> 1931年。

<sup>27</sup> 朝日新聞記事（前掲）

<sup>28</sup> 「放浪から転向「生活の設計」姿を消してゐた吉川清作君千円十五坪の家に」朝日新聞 1934年12月19日 p.13。

<sup>29</sup> 吉川清作自邸（第1期/下の家）。渡邊朱美さんのお話による。

<sup>30</sup> 後に吉川清作自邸（第2期/初代上の家）が建つ敷地内にあったという。吉川清子さんのお話による。村山知義の三角アトリエに触発を受けたものかもしれない。

<sup>31</sup> 初出は「軽鋼コンクリート住宅」『建築文化』1950年1月号 p.14。所在地は東京都中央区銀座西四の三となっている。もっとも、それ以前に伊藤谷蔵なる人物が東京で同名の事務所を運営していた（「伊藤谷蔵氏死去」読売新聞（夕刊）1943年8月4日 p.2）。もしかしたら、吉

## 作品各論

さて、概ねの背景については述べたので、吉川清作の人柄等については後で触れることにして、ここでは個々の作品を時系列順に取り上げていきたい。現在、資料から確認できる吉川清作の作品は100程度ある。

### 報知新聞社住宅懸賞図案(1等入選案) — 不明

吉川清作の作品リスト<sup>32</sup>の中に「報知新聞社住宅懸賞図案(一等当選)」と呼ばれるものがある。リストの筆頭に挙げられていることからして、かなり古いものと思われるが、その正確な年代は定かではない。筆者はこれが1915年(大正4年)秋に募集された「報知懸賞住家設計図案」のことであると見込んで調査をしたのだが、残念ながら全くの別物であった<sup>33</sup>。よって、吉川が当選したという住宅懸賞が

---

川はこの事務所を継いだのかもしれないが、確証はない。御遺族の方に尋ねたところでは、そのような話は聞いたことがないとのことであり、偶然の一致の可能性が高い。

<sup>32</sup> 『合理派建築』合理派建築会、1929、目次頁(個人蔵)

<sup>33</sup> 一応、その概要を記す。コンペは1915年(大正4年)8月27日の報知新聞に「懸賞募集 貸家の建築図案」と題する広告が掲載されたことに始まる。しかしながら、これは草稿を間違えて掲載したものであったとして翌日取り消され、改めて「懸賞募集 住宅の建築図案」と題した募集広告が掲載される。その趣旨は「最も低廉にして、而も堅牢便利なる可き家屋図案并に設計書を募集し、以て時世の要求に応じたい」というものであった。締切は同年9月20日とされたが、「審査員及び応募者の希望に依り」9月30日に延期された(報知新聞9月18日p.7)。審査員は入澤医学博士夫人、故後藤象次郎伯夫人、故岩崎彌之助男夫人、天野早大学長夫人、嘉悦孝子女子、審査顧問は伊東忠太、佐藤功一、清水仁三郎の三氏であった(同紙9月12日p.4)。審査員が女性なのは「住心地よきと云う□を主眼とし、それには家庭の中心たる婦人の実験に待つ所多かる可きを信じたから」であった(同、□は読字不能)。募集期間の間、「建築と設

何であったかは、未だ判明していない。ただし、吉川が報知新聞社主催の設計競技に当選したこと自体は、東京市庁舎コンペ当選時の新聞記事にも記載があり、また、後年(1935年/昭和10年)に行われた報知新聞社懸賞募集「山の住宅」では吉川が審査員を務めていることから、間違いのないと思われる。時期としては、1929年までのどこかの時点であるとしか限定できない。

### 現代の住宅—1920年

吉川清作が著した書物はこれまで2冊確認されている。そのうちの1冊がこの『現代の住宅』(大正9年、洪洋社刊)である。表紙には「工学博士大熊善邦先生閱 吉川清作君案 洪洋社編集局編」とあり、建坪で300坪を超える上流住宅から10坪未満の長屋まで、様々なスケールの住宅の図面が平面と立面をセットとして50案収録されている。図面の表記方法は統一されており、同時期に書き下ろさ

計」と題する連載が1面に掲載され、塚本靖、直木倫太郎、桜井小太郎、前田松韻、田島齊造、大熊善邦、森山茂、佐野利器が、それぞれの専門分野から住宅改良の理想を語った。審査結果は同年12月1日の同紙上にて発表され、一等に村上晴吾、二等に堀内恒夫、三等に阿部太郎、選外に松淵清助、荒井敏郎が選ばれた。応募総数は561通であった。選外を含む当選案の図面及び説明書は12月6日から14日にかけての同紙上に連載された。また、16日から30日にかけてはそれ以外の選外佳作についても図面と説明書が掲載された(その設計者は横田、福田安三郎、林道行、青木慎一、片倉豊吉、伊東東次郎、中沢幸市、清水留吉、前田佐一郎、栃木県庁土木営繕、岡田鷹谷、須田正次郎、小山立志、忍見平造であった(いずれもママ))。コンペへの応募案のうち佳作は、翌年出版された『報知懸賞住家設計図案』(佐藤功一編、大倉書店、1916)に匿名で収録された。本コンペの興味深い点として、一等と三等案が別人名義で応募されていたながら、平面構成や説明書がほぼ同じで、敷地想定を変えたバリエーションとみられること、県庁の営繕課が応募していることが挙げられる。コンペの概略については『建築雑誌』34巻(通号349号)pp.36-38に審査員だった清水仁三郎のコメントがある。



れたものらしい。時期としては曾根中條事務所の所員時代にあたる。

版元である洪洋社は大正から昭和戦前期にかけて、建築関係の書物を数多く出版していた出版社である。1912年（明治45年）に創業した洪洋社は、ちょうどこの頃（大正9年頃）より社外の建築専門家を入れた雑誌・図書を多く出版するようになっていた<sup>34</sup>。その代表的なものが『新住宅（後に建築新潮と改題）』という雑誌である。これは、住宅改良運動に寄与することを目的としたもので、編集顧問は大熊善邦と佐藤功一であった<sup>35</sup>（大熊は本書の校閲者、佐藤は報知懸賞「山の住宅」（昭和10年）の際に共に審査員を務め、どちらも吉川と関わりを持つことになる）。

問題の吉川清作の『現代の住宅』には前文や説明文などは付属していないので具体的な企図は判らないが、基本的には、いわゆる大正期住宅改良運動の流れに則り、建築専門家による一般向けの住宅設計の参考書として編まれたらしい<sup>36</sup>。その点では、この頃出版された『報知懸賞住家設計図案』（脚注で触れた）と同様であり、建物の規模を大から小まで取り揃えるところも同じである。ただし「報知懸賞」は、現実の中流住宅問題の解決を目的としたコンペであり、その作品集である『報知懸賞〜』には合わせて複数の建築家による実際の計画案を集成するなど、現実的な利用を強く前提としているのに対し、吉川の『現代の住宅』はかなり現実味に乏しい。具

体的には、敷地形状についてみるとすべて長方形もしくは正方形であり、また平面図も現実的な要求より外観上の操作を優先するくらい<sup>37</sup>があり、現実味に乏しい。すなわち本書は、実現を前提としたというよりかは、吉川清作により創作されたコンセプト的な案の集成という性格の方が強く伺える。この点で、この前後に出版された実用的住宅改良参考書に比して特異である。

それは時代の潮流とはやや離れたところに立っていたという点で、大正期の一般の住宅設計を研究しようという身からすれば不都合であるが、吉川の設計を検討しようという我々からすれば好都合である。特に本書に掲載された図面は吉川が曾根中條建築事務所時代に培ったものを読み取りうる唯一の資料であり、非常に貴重である。以下、やや煩雑になるが、掲載された50案を項目ごとに、順次見てゆきたい。（なお、本書は今日においては入手の難しい稀覯本であるので、ご遺族の方のご厚意により本記事の後ろに復刻した。誌面が小さいため文字が潰れて恐縮だが、適宜御参照されたい。）

## 上流住宅

本書は面積毎に5つのグループに分けられており、そのうち最も床面積の大きい上流住宅と題されたグループには5案が収録されている。その延床面積は310坪～552坪である。様式としては、4案<1-3,5><sup>38</sup>が応接部分には洋館を、居住部分には和館

<sup>34</sup> 大川三雄、川嶋勝「建築専門出版社・洪洋社の出版活動について：その1 編者と出版物の変遷」『学術講演梗概集・F-2、建築歴史・意匠』1997, p.93

<sup>35</sup> 「社外の建築専門家の活躍が活発になるのは、大正9年創刊の雑誌『新住宅』からである。編集顧問は大熊善邦と佐藤功一、寄稿者には今和二郎、蔵田周忠、森口多里、田辺泰のほか山本拙郎などがいた。この雑誌は住宅改良運動の一翼を担おうとするものであり、特に家政学的側面から家庭の主婦層までが読者の対象であった。震災による休刊後の大正13年には『建築新潮』と改題し、帝都復興事業による一般社会への建築への関心の高

まりを受けて、住宅に限らず建築全般を対象とするようになる。蔵田や森口などの、当時増加しつつあった海外渡航者による即時性の高い寄稿を多く掲載し、一方で日本国内における信仰建築運動を支える舞台にもなった。」（Ibid. p.94）

<sup>36</sup> 『新住宅』誌を参照すれば、本書の広告が掲載されている可能性があるが、資料取り寄せが能わなかった。

<sup>37</sup> 例えばシンメトリーへの軽い執着など。本文中で後述する。

<sup>38</sup> 『現代の住宅』に所収の作品には題名が記されていないので、以下、作品を<ページ番号>の形で示す。

を当てる、いわゆる和洋併置型とし、1案<4>のみ、純洋風（ハーフティンバー）となっている。平面計画上は、各案共通して軸を若干振り、南に面した部分を雁行させている<sup>39</sup>。門扉から車寄せへはいずれも正円形を組み合わせた車路でつながれているが、自動車の軌跡を考慮した様子はなく、あまり合理的な設計ではない（特に<3>の8の字型になっている部分などは、実際に車がこれに沿って走るとなると著しく不便だろう）。もっとも、1920年（大正9年）当時の自動車の保有台数は乗用・貨物用合わせて8000台に満たず、人力車の11万台、荷車や自転車の200万台に比べてまだ数も少なく普及の途上にあったから<sup>40</sup>から、無理らしからぬことである。庭園部について見てみると、<1>は西洋館の前に幾何学式庭園を、和館の前に池泉を含む回遊式庭園を並べ、<3>においてもこれが基本的な方針となっている。しかしながら他の案は<1,3>ほど複雑ではなく、簡単な園路と植栽で構成されている<sup>41</sup>。<4>については、木立の中に建つことを想定しているのか、そもそも後庭の計画をしていない。

この点に関連して、時代はかなり飛ぶが、晩年の吉川清作は庭の芝生の手入れを唯一の趣味としていたという話を御遺族の方から聞いた。

「それでお父様（清作）は芝生が大好きでね。…だから、お庭もこういう感じで、それでお父様はお庭の芝生が命だって言っていました。それだけは覚えてます。芝生を青々とさせて、仕事としては草取りをして、芝生を青々とさせて、椅子に座ってのんびりとしているというのが、なんか、それが夢だ

ったのかしらね。よくそういうことをしてましたよ。」（吉川清子さんのお話）

しかし、芝生以外の植物を自ら育てる様なことはなかったという。「上流住宅」の庭園案と合わせて考えてみても、吉川清作にとっては、庭園や外構は積極的な操作の対象ではなかったということなのだろう<sup>42</sup>。

さて、さらに詳しく見てみると、<1>は敷地の対角線を基準とした、線対称を意識して計画されている。しかしながら、これは厳密に守られているわけではなく、あくまで諸室の要求に従いながら、全体的な棟の配置の仕方にのみ反映されている。ここではとりあえず吉川の「軽い執着」と呼んでおきたい。また、南東の大座敷を頂点として棟が大きな三角形を構成していることも、この案の特徴である。また、三角形は中庭にも表れている。もっとも、ここでの三角形は線対称への「軽い執着」より発生したもので、第一義的ではないが、三角形はその後の吉川の作品に頻出するテーマの一つであるので、鍵括弧で「三角形」と表記し、キーワードとして挙げておきたい。

<2>および<3>には、共通して大きな花壇が設けられているが、いずれも母屋の裏側であり、庭園の主要な要素とはなっていない。また、洋館のドーマー窓も共通してみられるが、<2>の方は端部を折り返し、なんとなく墓股を彷彿とさせる形状である。

<4>は門扉や自動車車庫までを含め、全体でかなり厳密に線対称としている。ただし、階段の位置

<sup>39</sup> もっとも、<5>は軸を振ってはいないが、雁行の気は少ない。どちらかと言えば庭の独立性を守るために客間を張り出し、アプローチとの分離役を担わせたために起きたものと思われる。この手法の小規模なものは<23>にもみられる。突飛だが、古の寝殿造における中門廊が思い出される。

<sup>40</sup> 片山三男「明治・大正・昭和初期の道路交通史：二輪車を中心に」『国民経済雑誌』192巻3号, 2005, p.44

<sup>41</sup> ただし和館の前の園路には飛び石が置かれており、建物との関係性に配慮してなかったわけではない。

<sup>42</sup> ただし、ないがしろにしていたわけではない。それは後述する渡邊隆邸や、渡邊朱美邸で、パーゴラや池が設けられているところからも明らかであろう。ただ、あくまで主眼は建築にあって、庭にはなかったという、建築家としてはごく当たり前の事実を確認しただけのことである。

や窓の数など、詳細はやはり内部の要求を優先している（「軽い執着」）。

## 邸宅

「邸宅」と題されたグループには13案の作品が収められており、これは当書の中で一番多い。外観を基準とすると、このうち10案までが洋風の造りで、純和風は2案、和洋併置が1案と純洋風住宅がそのほとんどを占める。これは他のグループとも共通することだが、本グループにおいては特に現実的ではない案がみられる（特に<10,12>など）。洋風住宅は概して観念的であり、本宅というよりはヴィラという印象がある。線対称への執着は、ここではかなり徹底しており、内部まで及んでいる（<6,10,12,14>など）。ただ、<7,10,18>はスタイルこそ異なるものの、いずれもかなり洗練・統一された外観を持っており、この点は吉川の力量を伺わせるものがある。吉川は生涯海外に出たことがなかったとのことであり、これらの知識はいずれも、図書や写真などから勉強したものであるらしい。そう考えれば、洋風よりも和風住宅案（<16>など）の方が、内部構成に於いて複雑であり多様なのは頷けるところである。

邸宅について個々に見ていくと、<6>は庭園から内部構成までほぼ一貫して線対称としているにも関わらず、立面図においては植栽が不均等に配されその均衡を破っているのが何とも不思議である。<7>は立面・平面ともに細かく書き込まれており、特に全室に家具が配置されているのは本書中これのみで、意欲の高さがうかがえる。<8>は北面から見ると洋風なのに対し、南側から見ると和風という珍妙な案。<9>は和洋併置型で、雁行配置とし、屋根も宝形がリズムカルに連続する面白味あるものになっている。<10>は平面のシンプルさに比べて建坪84坪、延208坪と著しく大きい。これは邸

宅中でも随一の大きさであり、こう階高が高くては夜なかなか寝付けまいであろうなどと余計な心配をしてしまう程である。<11>は正方形平面が特徴的な案で、後年の吉川清作自邸（第3期・2代目上の家）を彷彿とさせるものがある。<12>は平面中に円形や曲線も取り入れたうえで線対称としているパズルの様な案だが、その影響を受けたのか他の「邸宅」には存在した浴室がこの案の中にだけは見られない。<13>は「三角形」への意識が強く出た案で、中庭及び全体の構成にその傾向がみられる。ただ、上流住宅<1>と同じように、これは導入の軸を振ることによって生まれたもので、全体がAの字をしていることからしても、三角形にしようという意識が先にあったとは思われない。洋風の<14>はちょうど和風の<11>案と対を成す案で、全体を正方形とし、正面に客用玄関と内玄関を並べるなど、共通した手法がみられる。ただ、和風の<11>が客用玄関をやや大きくとり、内玄関との格式の差をつけたのに比べて、洋風の<14>では客用玄関・内玄関とも同様の造りとなっている。これにより、外観上は<14>案の方がやや吉川の意図に近いものになっている。ただ、内部は内玄関のホールに浴室が直接接続されており、寝室に相当する室が取られていないなど、やはり現実味は薄い。<15>は洋風でまとめられているが装飾は多くなく壁もモルタル塗り風の平滑な表現で、他の作品とはやや異なる。<9>などの和風邸宅で試みた雁行配置を洋風でも行うことを狙ったものらしい。南北軸に対して線対称であるほかに、各立面もシンメトリーに持ち込もうとしている点は注目される。<16>は比較的純粋な和風邸宅に属するもので、洋館や洋間はない。廊下がやや広く長大なのは気になるが、それ以外は「三角形」や「軽い執着」といった吉川らしさもなく、この点は、大熊善邦の校閲か編集者の意向が作用したのかもしれない。<17>は内部の大半を和室

としながら、外観を洋風でまとめたもので、南側が雁行配置となっている。先の<16>と比べて、こちらの方が吉川の意図を強く反映しているように思われる。<18>は本書中唯一、透視図が添付されている作品である。平面図も他とは異なり手書き風で、これのみ制作時期が異なる可能性がある。透視図右下には親子連れと思しき3人の人物が描かれているが、後出する京橋日活館の透視図にも同じような人物画が表れる。マンサード屋根が全体を統制しているが、様式としては表現主義的である。本書が刊行された1920年は分離派建築会が発足した年であり、時代の風潮に先んじていたわけではないし、吉川はかなり同時代的な意識を持っていたと言える。

### 中流住宅

「中流住宅」と題されるグループは9葉から成るが、<22>は甲・乙の2案が掲載されているので、実質的には10案が収録されている。規模は建坪で36~58坪である。これを外観によって区別すると洋風3案、和風5案、和洋併置型2案となっている。和風住宅にはL字を取るものが多く(<21,23,24,25,27>)、洋風住宅には平面もしくは立面上で幾何学的な形態を試みているものが多い。

個々に見てゆくと、<19>は正方形平面の外観洋風でまとめられているが、平面計画上1階を壁式の洋風、2階を柱梁式の和風として階ごとに分けている点に特色がある。<20>は八角形と正方形を組み合わせたヴィラ、あるいは隠居屋のようで、ほぼ完全な点対称となっている。<21>はL字型平面をした和風住宅。南北に1本ずつ廊下が通り、台所も茶の間・居間と分断されていて、あまり新鮮な創意工夫は見られない。<22>は純和風でまとめた甲と、応接部を洋風とした乙の二案から成る。乙案はいわ

ゆる和洋併置型に分類されるものであるが、洋館基礎の換気口を和館部分にも連続して設けるなど、正面側全体がやや洋風寄りにまとめられているのは、<8>で見られた外観統一の工夫と同じ系列のもので注目される。<23>はシンプルな和風住宅。<24>は、和洋併置型のひとつであるが、洋館部がフラットルーフとなっている非常に特異な案である。屋上には「露台」と表記があり、和館2階より出入りできるようになっている。手すり壁部分に植栽があり、その点で「屋上庭園」の試みの一種とも思われるが、吉川がどの程度意識していたかは不明である(藤森照信によれば、日本における「屋上庭園」の早い例は1915年の秋田商会に見られ、小規模には1933年に堀口捨巳が岡田邸で試みたが、本格的なものは戦後を待たねばならないという<sup>43</sup>)。吉川の本案はちょうど秋田商会と岡田邸の間に位置することになる)。<25>と<27>は、ともにL字型平面を持つ和風住宅であり、平面計画もよく似ていることから、一種のバリエーションと思われる。<25>は二階を持つ為に、<27>よりやや規模が大きくなっている。<26>は<8>と同様に、外観を洋風で統一しつつ、内部に和室を含めた住宅である。著しく大きな宝形屋根(正確には長方形平面なので宝形ではないが)は、<18>と同じくメルヘンチックな印象を受ける。

### 小住宅

「小住宅」と題されたグループには11案が収録されている。面積としては建坪9.5坪~27坪までである。外観を基準とすると、純洋風のものが6案、純和風のものが3案、和洋併置が1案、面により様式を変えたものが1案である。

<28>は外壁を簡素な塗り壁とし洋風でまとめているが、<19>などと同じように内部は1階を洋

<sup>43</sup> 藤森照信「タンポポ・ハウスのできるまで」朝日新聞

間、2階を和室と階ごとに区分している。〈29〉はむくりのついた入母屋屋根を持つ住宅で、壁は大壁となっているものの、外観は概ね和風である。一方で内部は完全な洋間となっており、和室を洋風の外観で包んだ〈17〉とは逆の構成を取っている。〈30〉は〈1,13〉などと同じように45°に振った軸線を持つ案であり、外観はモダンにまとめられている。玄関に鉄線で支持された庇が出ているのは注目される。煙突に表現派風の微かな曲線が与えられていることも興味深い。〈31〉は宝形屋根（今度は正方形平面を持つので確かに宝形屋根）を持ち、外観はチューダー風の意匠が見える。しかしそれで統一されているわけではなく、入側の前には沓脱石が置かれているなど和の要素も混在している（特に応接兼書斎の上部についている屋根は破風のように見える）。〈32〉は〈30〉と同じように軸を振り、平面計画の上では〈19,28〉などと同じように1階を洋間、2階を和室でまとめている。玄関の車寄せの上は露台になっており、植栽がみえる。庭側から見た立面を完全なシンメトリーとしている。〈33〉は〈8〉と同じように、面によって様式を変えたもので、南面が和風となっているのに対して、西面は洋風の塗り壁となっている。内部は和風の間取りとなっている。〈34〉は基本的に応接部を洋風、母屋を和風とした和洋併置型に属するものだが、応接部と母屋は別棟とならずに連続した屋根を持っている。それ以上に注目すべきは、その屋根が応接部の直上部分のみ入母屋となっていることで、他の部分が簡素な寄棟なのに対して、強い和風の印象を与えるものになっている。これは、応接部の洋風の感じを打ち消し、全体を和の感じで統一しようという試みと思われる。〈35〉は〈19,28〉と同じように外観を簡素な洋風でまとめた上で、1階を洋間、2階を和室と分けた例である。〈36〉はこれまでもいくつか出てきた和洋併置型に属する典型的な例で、ベイウィン

ドウと切妻を持つ大壁の応接部に対して、寄棟・真壁の母屋が対置されている。〈37〉は〈20〉と同じように全方位から見てシンメトリーとすることを狙ったもの。窓の配置も概ね揃えられているが、浴室・便所や台所の部分のみ異なっている。この部分が裏手にあたるからということであろうが、実用にある程度配慮しつつ自らの興味を実現しようとする吉川の「軽い執着」の好例であり興味深い。〈38〉は平屋建ての和館だが、廊下や入側・縁側を分散させ、長大な一本の中廊下といったものを採用しなかった点に創意がみられる。茶の間と居間の部分に着目すると、南北方向に一間分ずらされ、〈37〉と共通するような「ねじれ（回転）」の意思が感じられるが、北面に納戸や水回りがとりついているため表立ってはいない。

### 貸住宅

「貸住宅」と題されたグループには12葉が充てられているが、〈39〉は甲乙の2案が掲載されているので、実質的には13案が収録されている。これらはいずれも長屋（タウンハウス）形式のもので、規模としては一戸あたり建坪6.25坪～18坪である。〈39 甲・乙〉は平屋建てであるが、それ以外はすべて2階建ての案となっている。様式としては和風のもの8案、洋風のもの5案で、和風のものやや多い。いずれも外部と内部は同一の様式で設計しており、これまで見られたような和洋を混ぜ込んだり、部位で使い分けたりするような試みはなされていない。平面計画上について見ると、共通して堅実に設計なされている。「邸宅」や「中流住宅」では線・点对称にこだわり、幾何学的な平面をもつものを複数提案していたことを思うと、これは奇異に思われるが、長屋（タウンハウス）の場合は同一平面を繰り返す以上、必然的に立面はシンメトリーとなるので、あまりこだわる必要がなかったということなの

かもしれない。

個々の建物については、取り立てて取り上げるべきところは見られないが、<40>が全面的にフラットルーフとなっていることは注目される。陸屋根自体は<24>の応接部にも採用されていたが、全面的に採用したのはこれが『現代の住宅』の中で唯一である。パラペット部にクリンプ網で出来た手すり壁らしきものが見えることから、屋上の利用を想定していたのかもしれないが、ペントハウスや植栽の類が書き込まれていないので定かではない。

### まとめ

ここまで、吉川の『現代の住宅』を概観した。これら五十数案を通して、特徴的と思われる点をいくつか挙げたい。

まず「三角形」や「シンメトリーへの軽い執着」が挙げられる。これらは、後の日活神田館（1924）や伊東の別荘（1961 以前）<sup>44</sup>、紫カントリークラブハウスすみれコース（1961）などでも繰り返される（個々については作品各論で分析する）。「三角形」については『現代の住宅』では平面計画に表れるもの（<1, 13, 17>など）がほとんどであったが、後の作品では立面を構成するモチーフとして表れている。これについては村山知義の三角アトリエ<sup>45</sup>との連関も考えられるが、吉川の『現代の住宅』の方が時期的に先行しているので、少なくとも直接的な

村山の影響ではない（後の作品への影響はあったかもしれない）。

もうひとつの特徴は「様式混交」への挑戦である。在来の和風木造建築と外来の洋風建築をいかに調和させるか（あるいはどちらを重視するか）という問題は、明治期の議院建築における様式選択問題に端を発して、本書が刊行された大正期にも建築界の主要な問題として存在していた。これに対し、吉川は「和と洋を併置する」「和を洋で包む」といった現代でも見られる一般的な方法から、やや珍しい「洋を和で包む」「面によって様式を変える」といったアプローチまで実に多様な回答を試みている。様式混交が特に必要とされるのは、床面積が狭小な場合であるが、本書においては比較的規模が大きく和洋併置型を採用しても差し支えないと思われる「邸宅」と呼ばれるグループでもこのような試みがみられる。このことは、これが実は本書において吉川が追求した一番のテーマであったことを示唆するものである。そのように考えると『現代の住宅』の計画図案が現実性を欠くものであったことも納得がいく。すなわち台所の設計や、茶の間との関係性といった具体的な細部ではなく、全体の取りまとめ方を考えるのが本書の主眼であり、内容は問われなかったのである。<sup>46</sup>

（未完）

<sup>44</sup> 吉川清作が個人で所有していた別荘。作品リスト（本連載の最後に掲載予定）を参照のこと。

<sup>45</sup> 本橋 p.30

<sup>46</sup> もっとも、出版社側の企図がそのようなものであったかどうかはわからない。

現代之住宅

【復刻】



工學博士

大熊喜邦先生閱

吉川清作君案

洪洋社編輯局編

# 現代の住宅

東京牛込

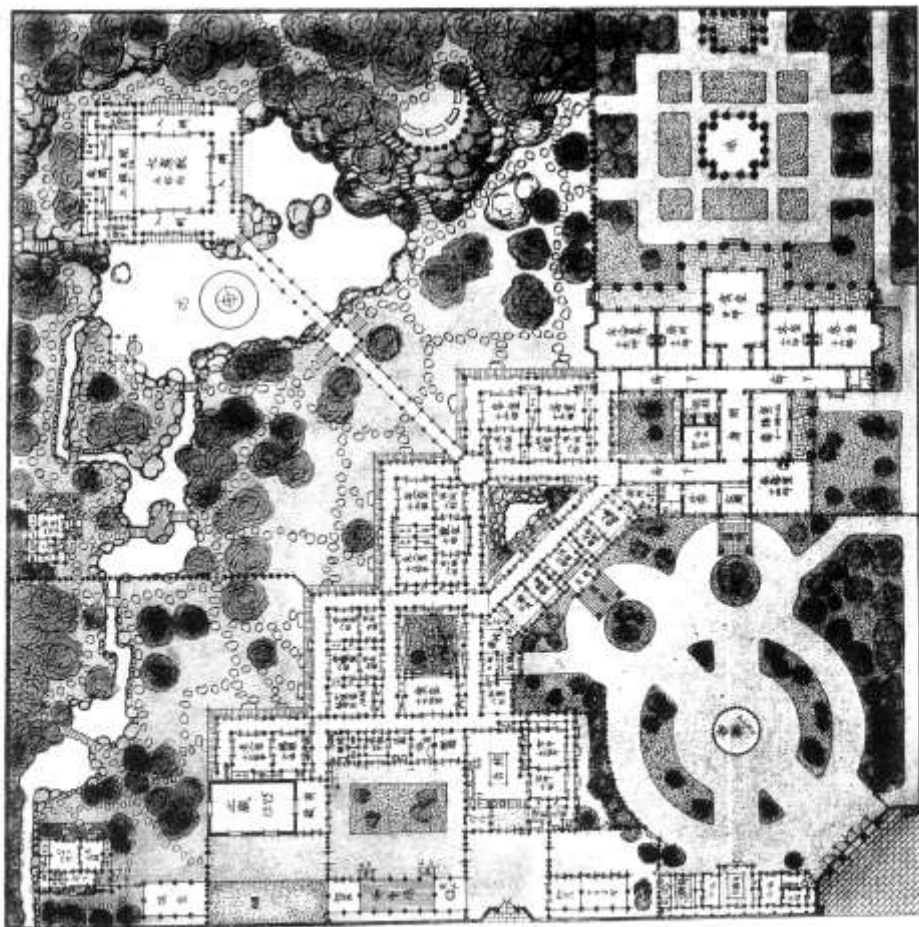
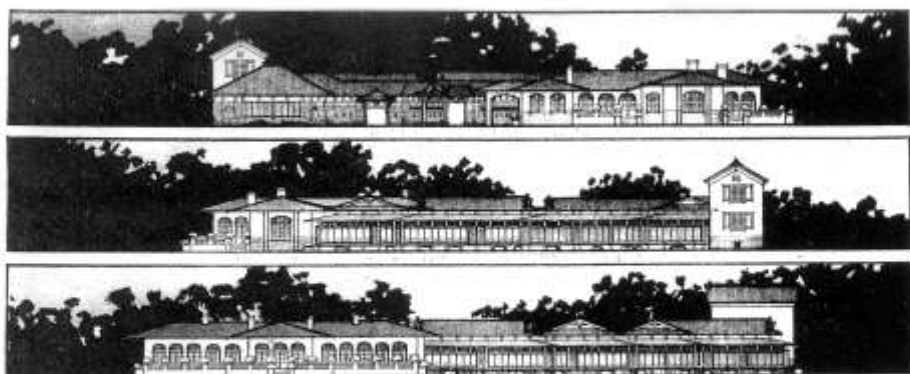
洪洋社發行

上級住宅	一……五
邸宅	六……一八
中流住宅	一九……二七
小流住宅	二八……三八
貧乏住宅	三九……五〇



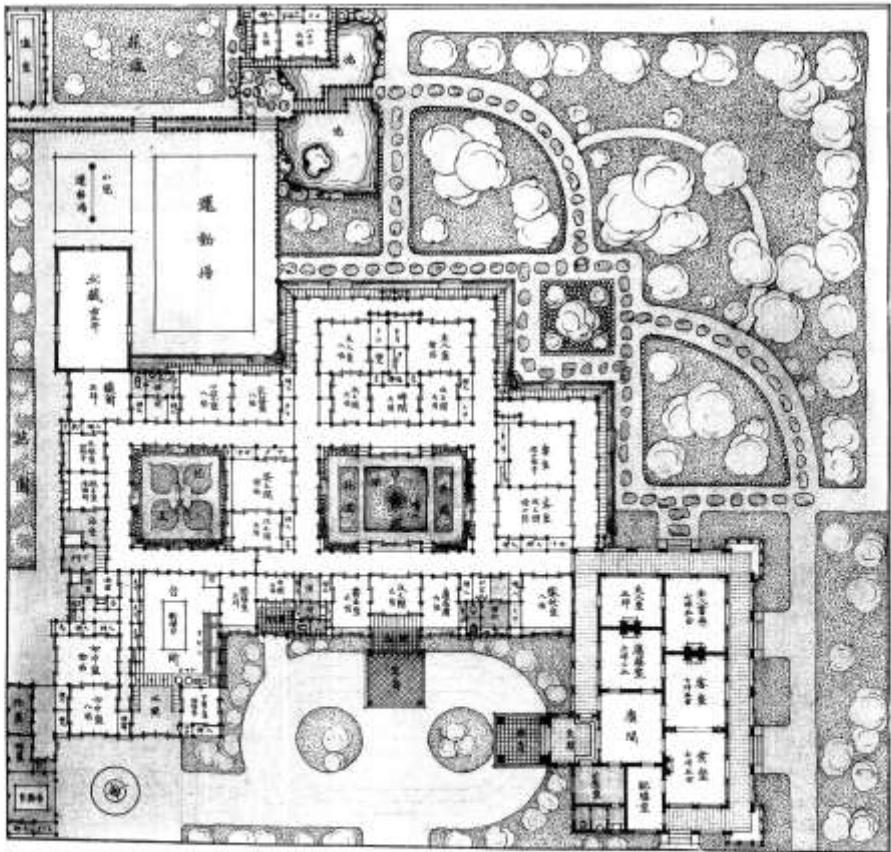
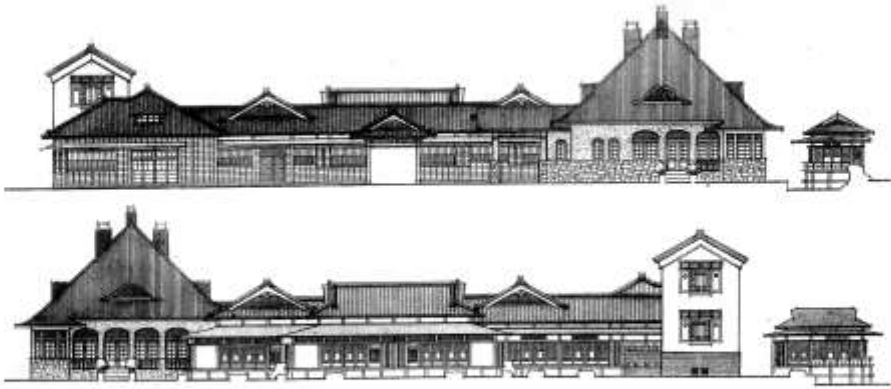
部門	12
番號	3059





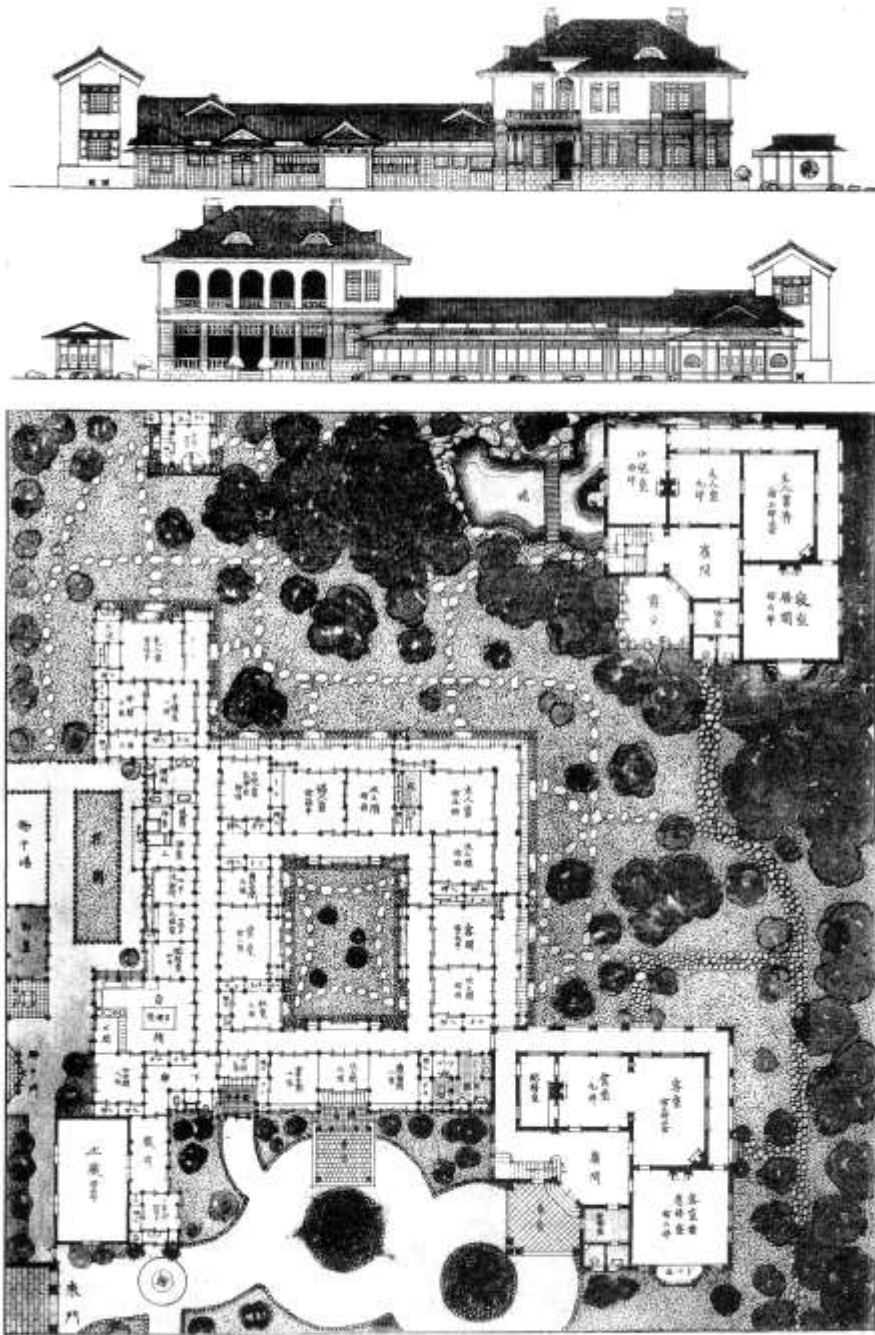
上流住宅

建築 日本館 55.0 洋館 194.0 土蔵 10.75 延坪 260.75



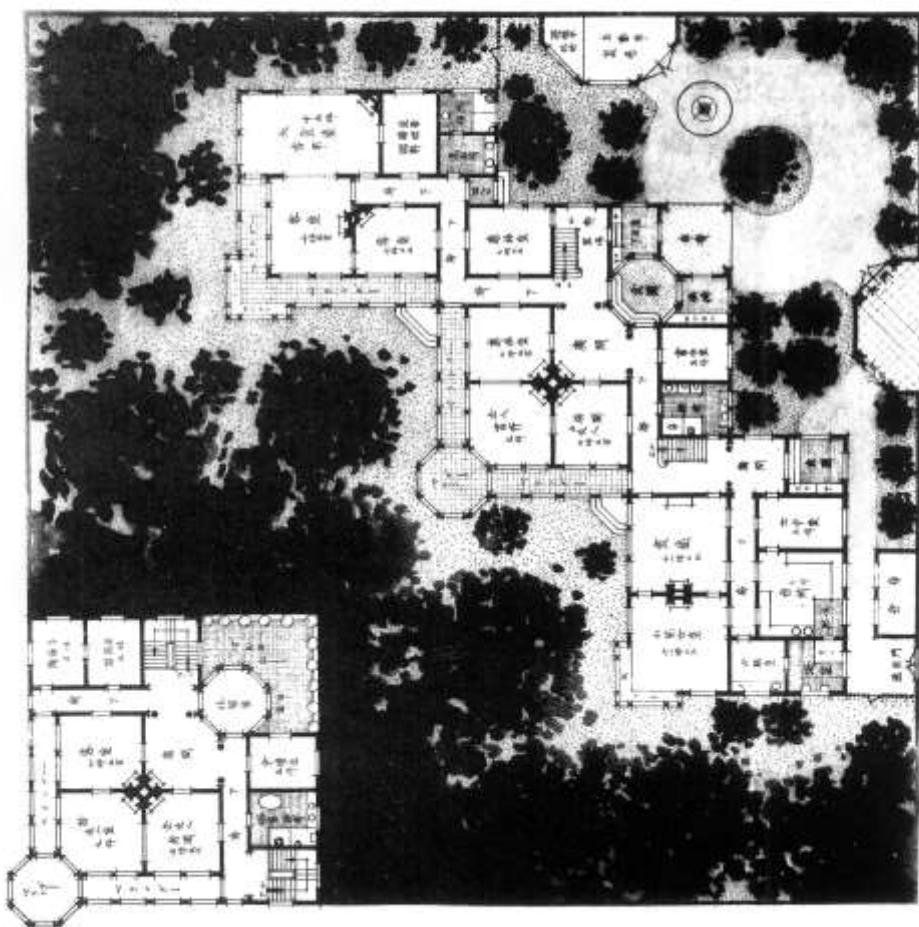
上流住宅

建坪 187.0 日本館 277.0 上蔵 13.0 庭中 225.0



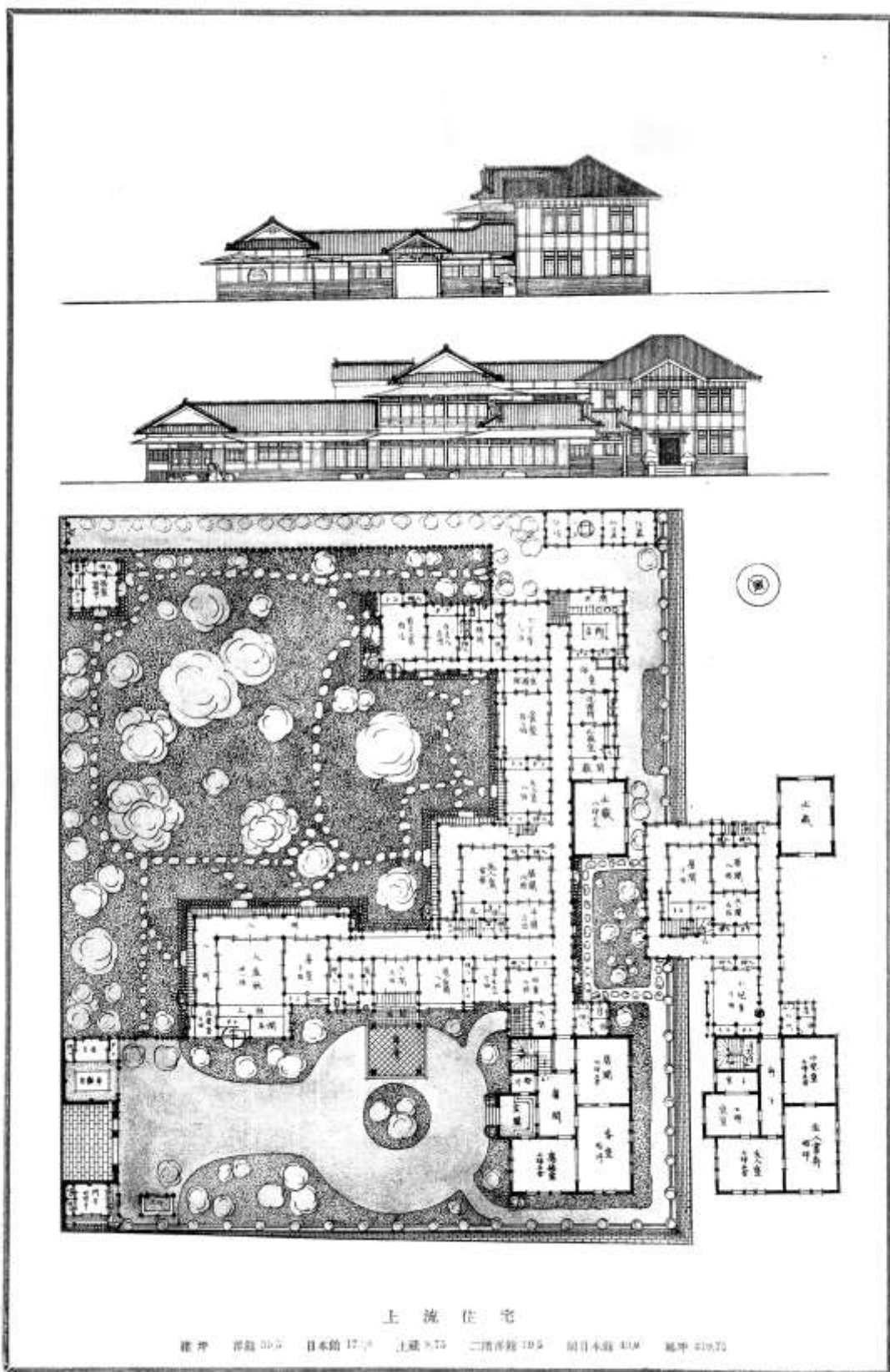
上流住宅

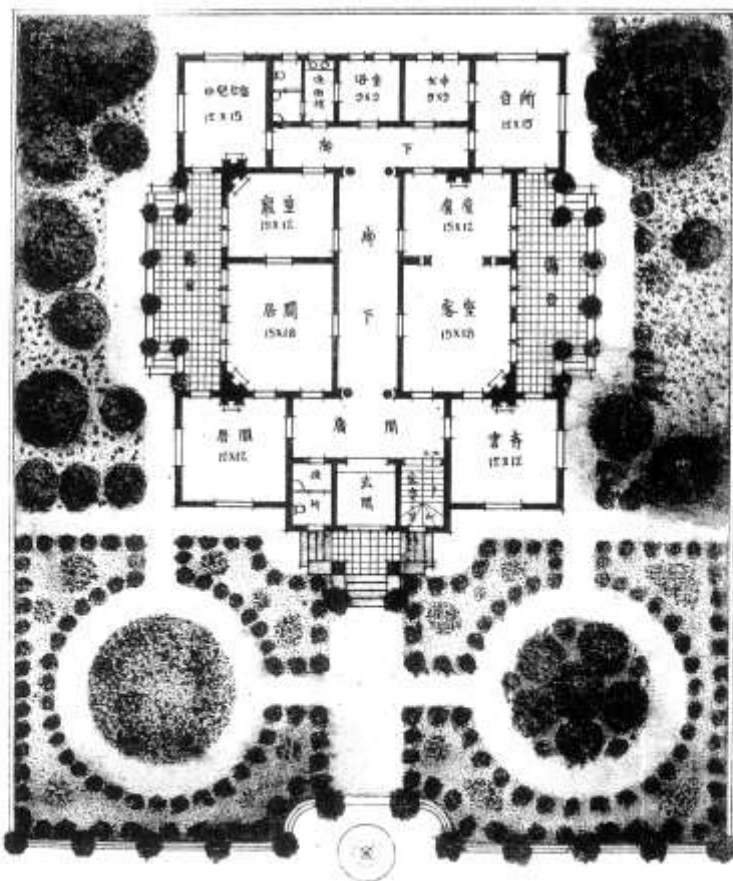
建築 津田 大 助 日本館 225.9 上流 13.9 二階洋館 7.9 基壇 40.24



上流住宅

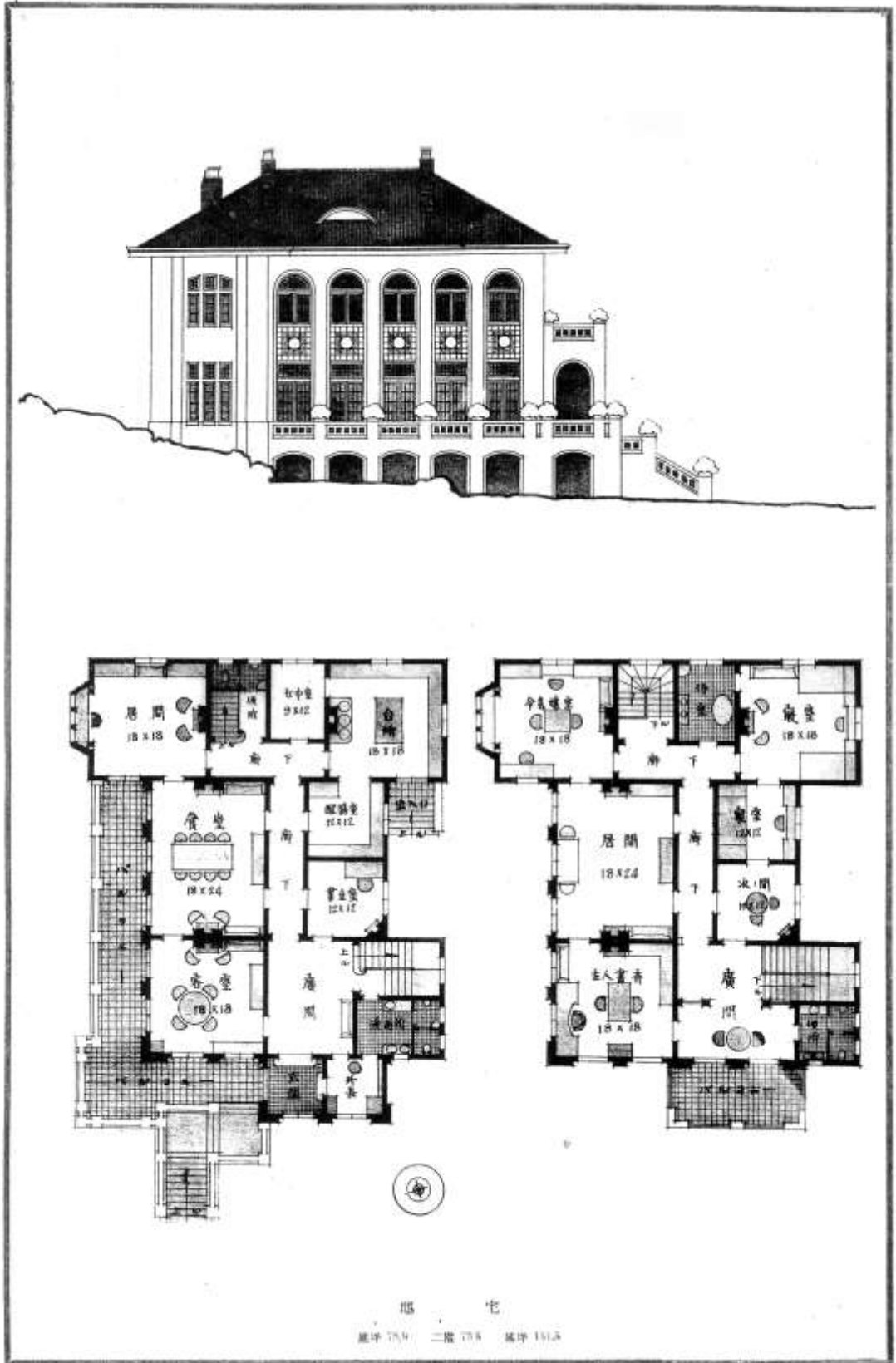
建坪 371.0 二階 10.0 延坪 471.0





邸宅

総坪 20.75 二階 10.51 敷坪 87.25

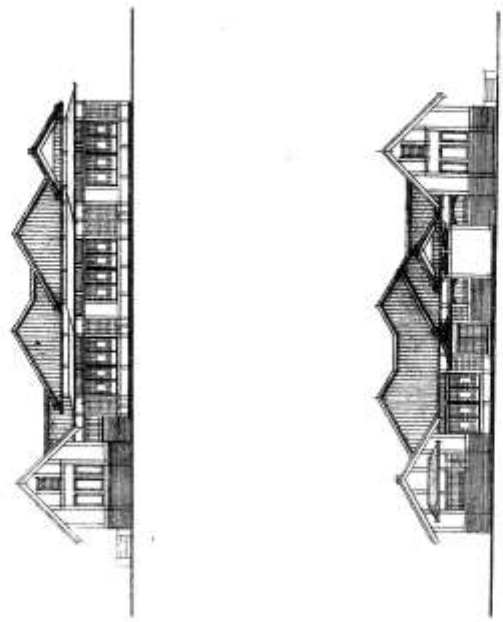
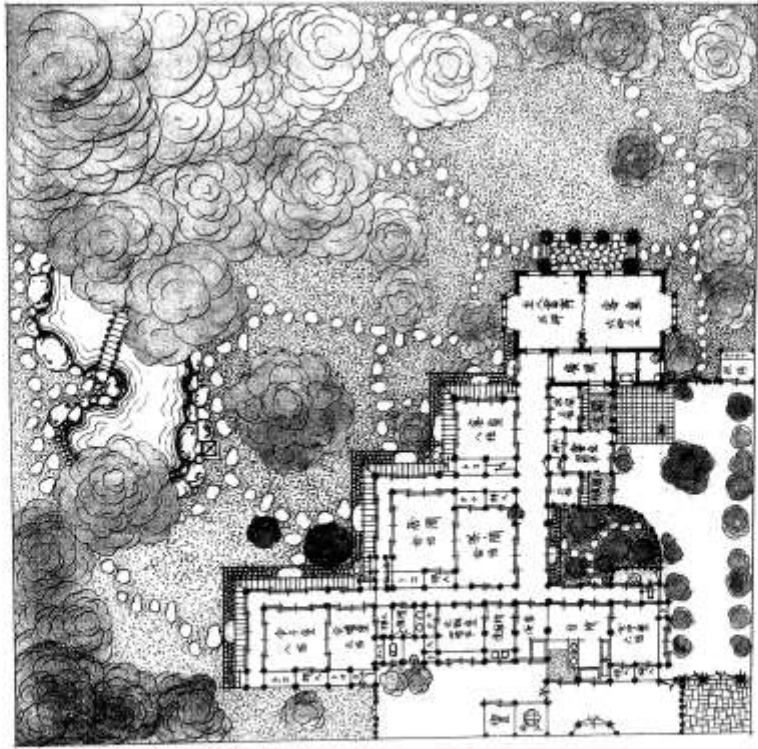


七

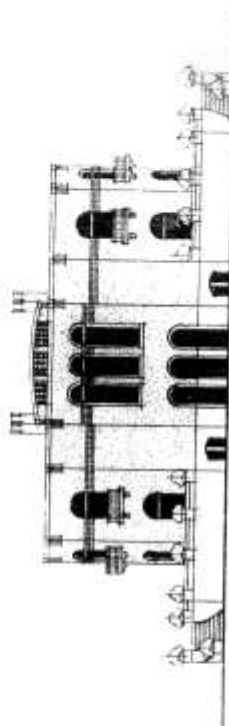
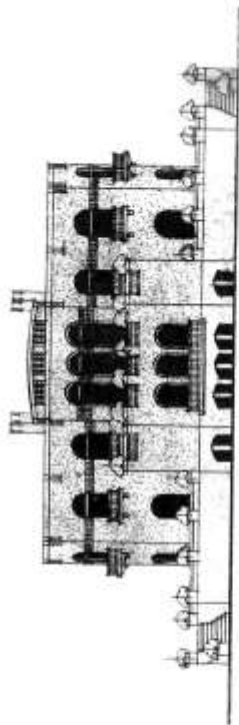
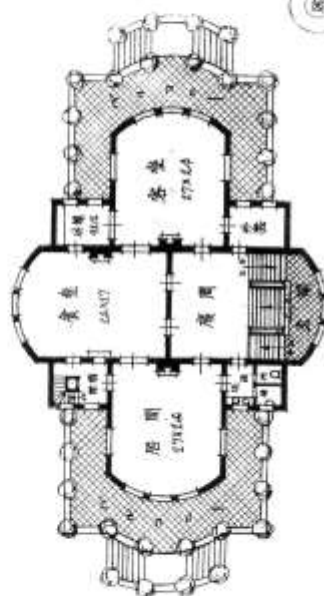
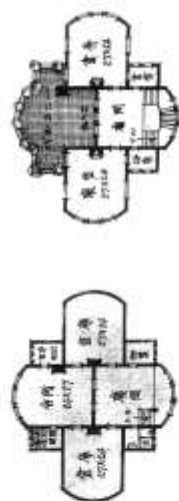
一階 75.4 二階 75.8 三階 131.2



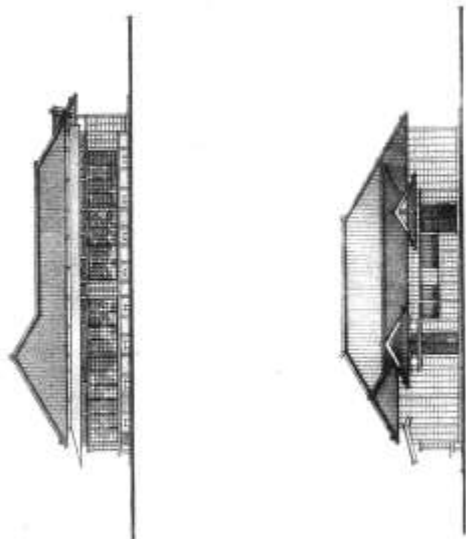
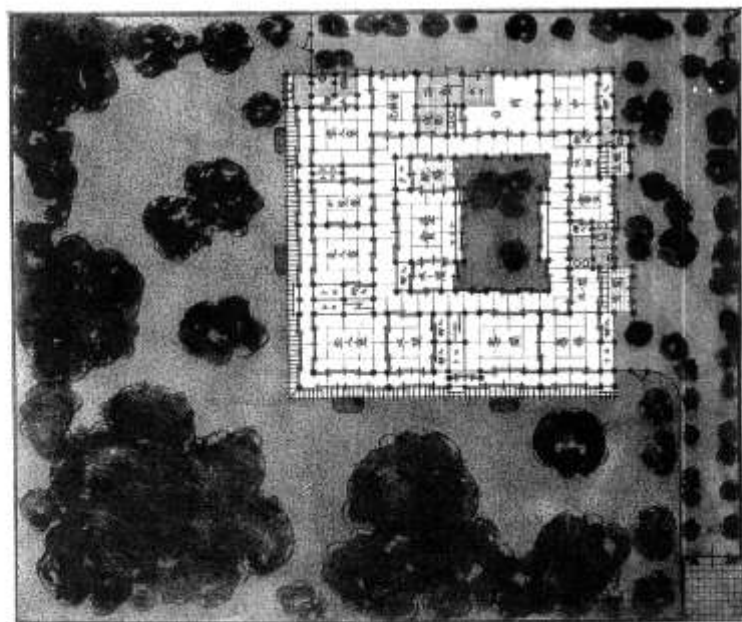


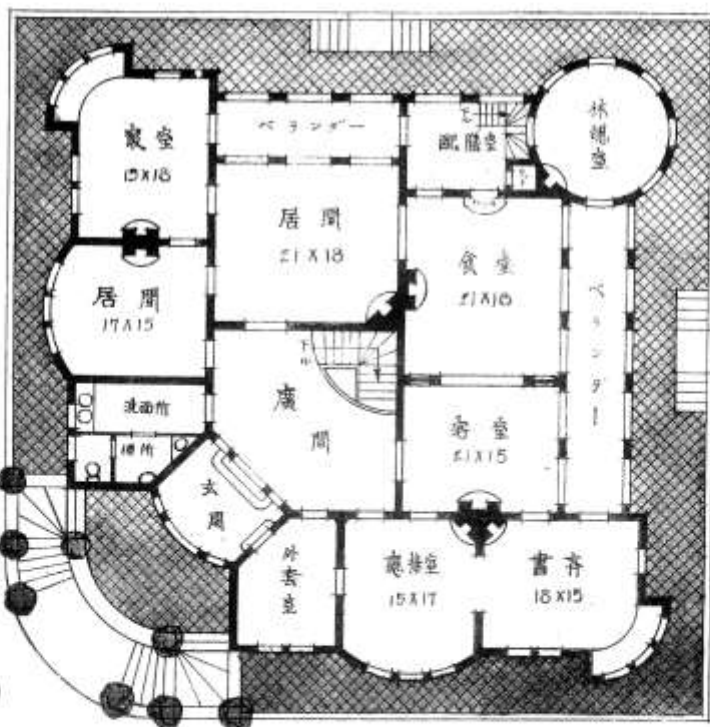
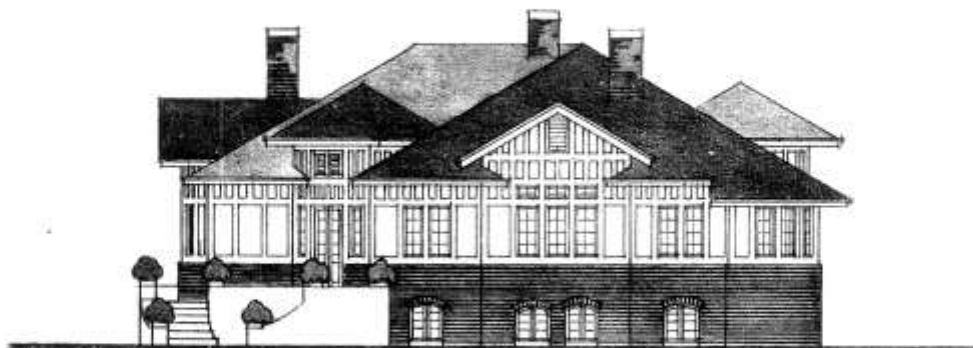


第七  
住宅



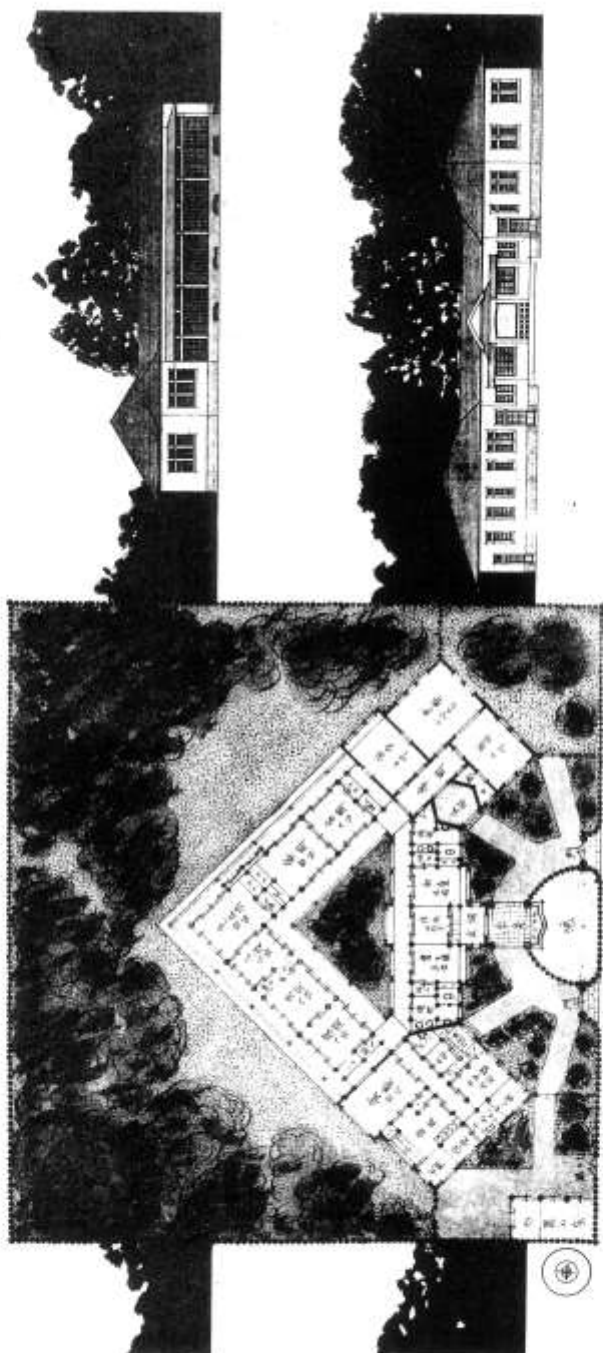
邸 七  
設計 846 二階 400 建築 846 建築 205.0



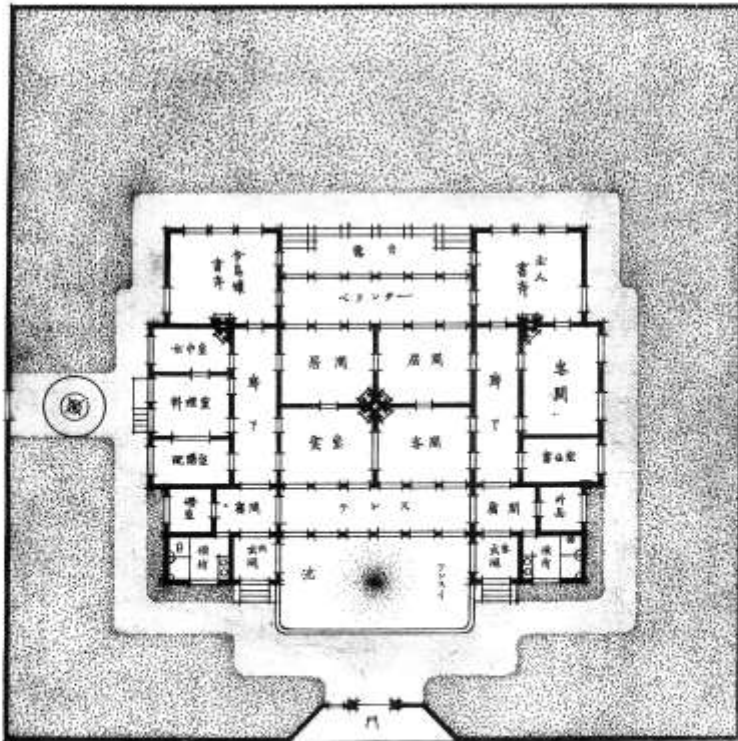


邸宅

竪坪 9x9 地階 2x2 高坪 12x9

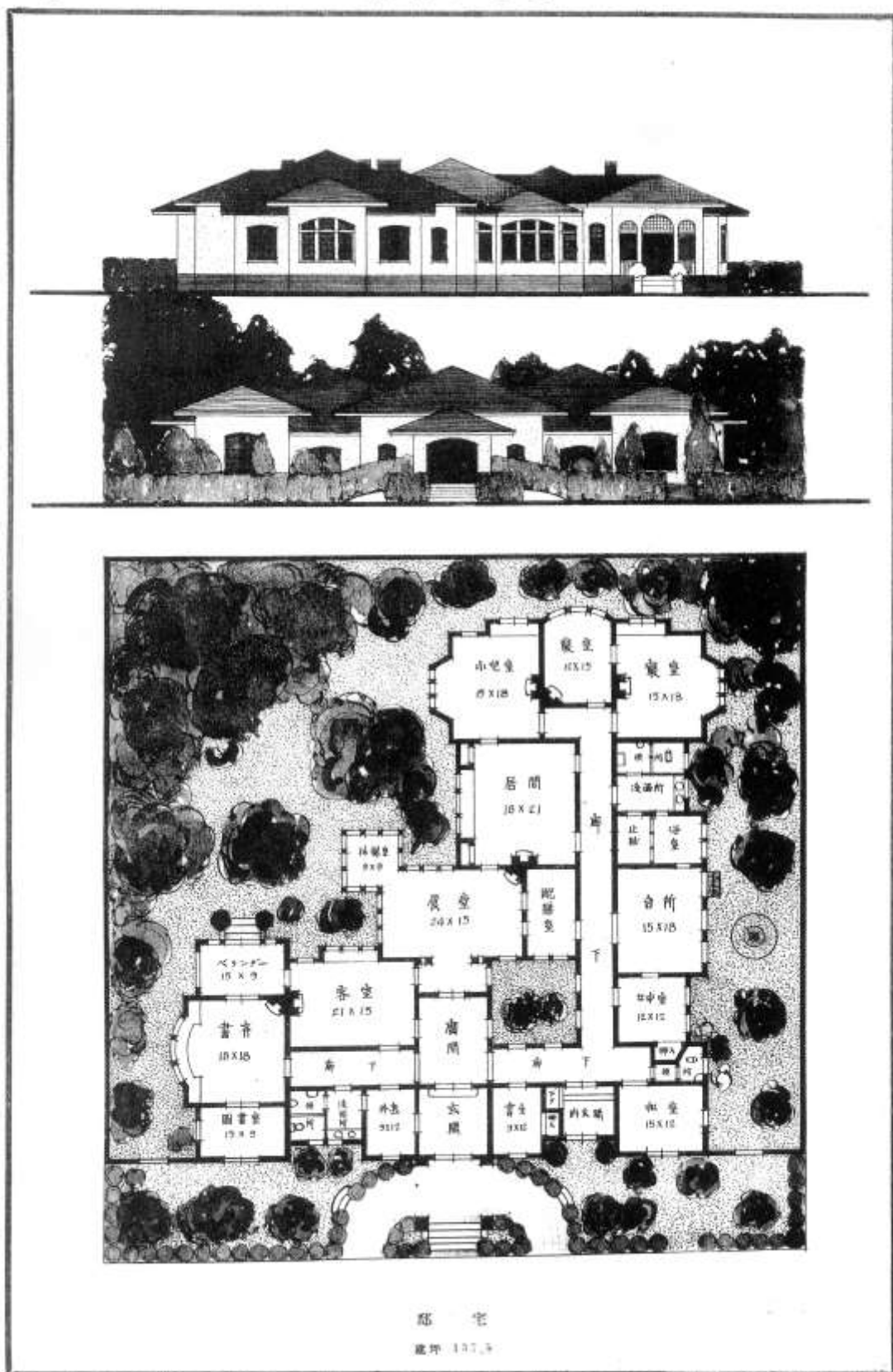


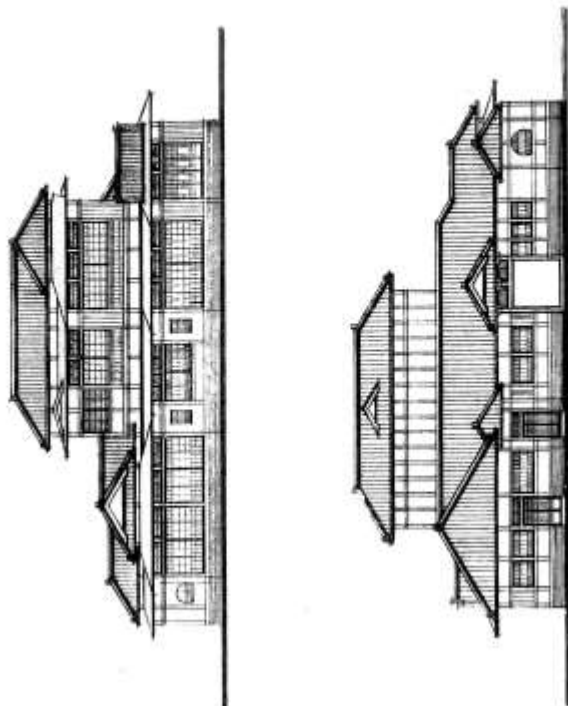
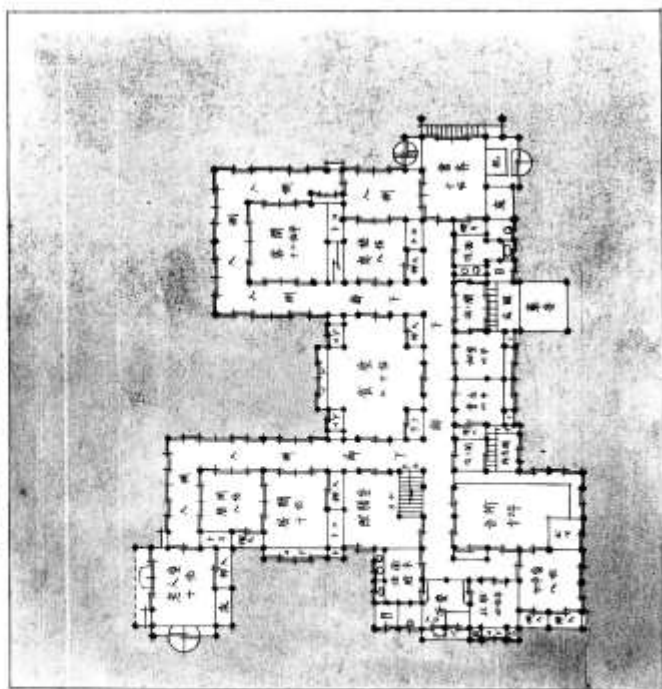
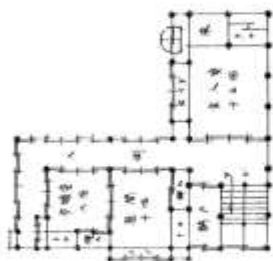
住宅  
設計 1933



邸宅

建坪 110.0

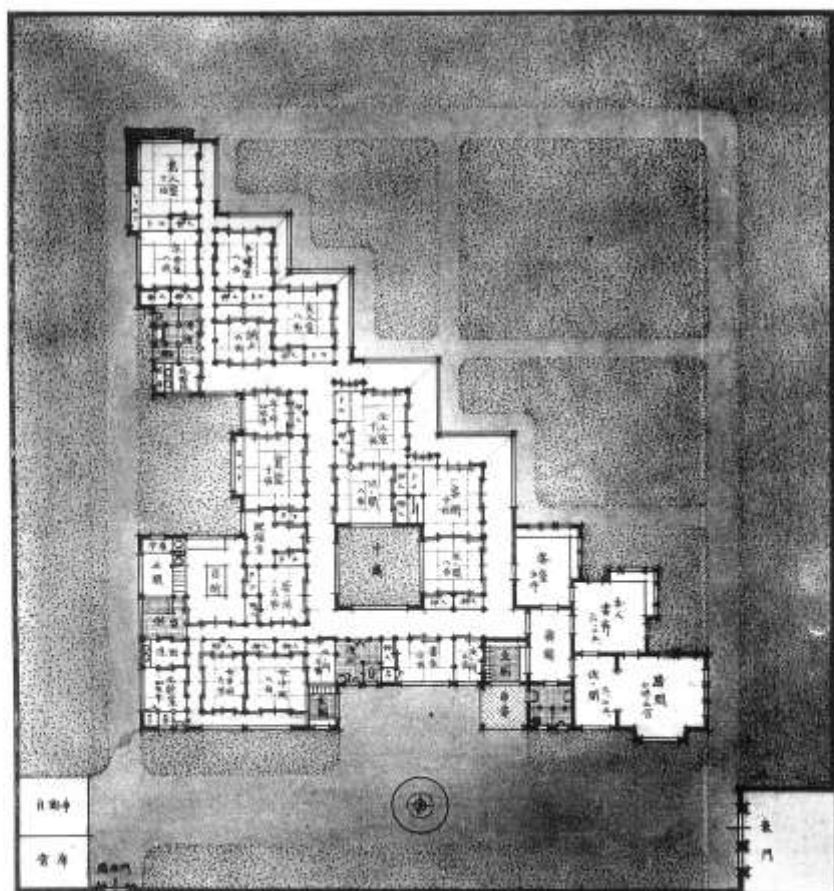




邸宅

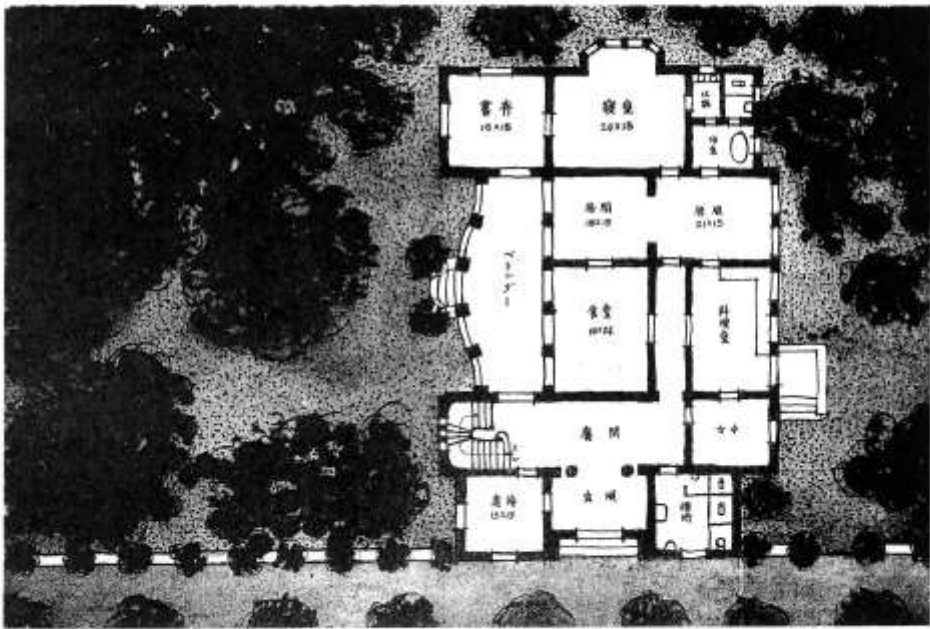
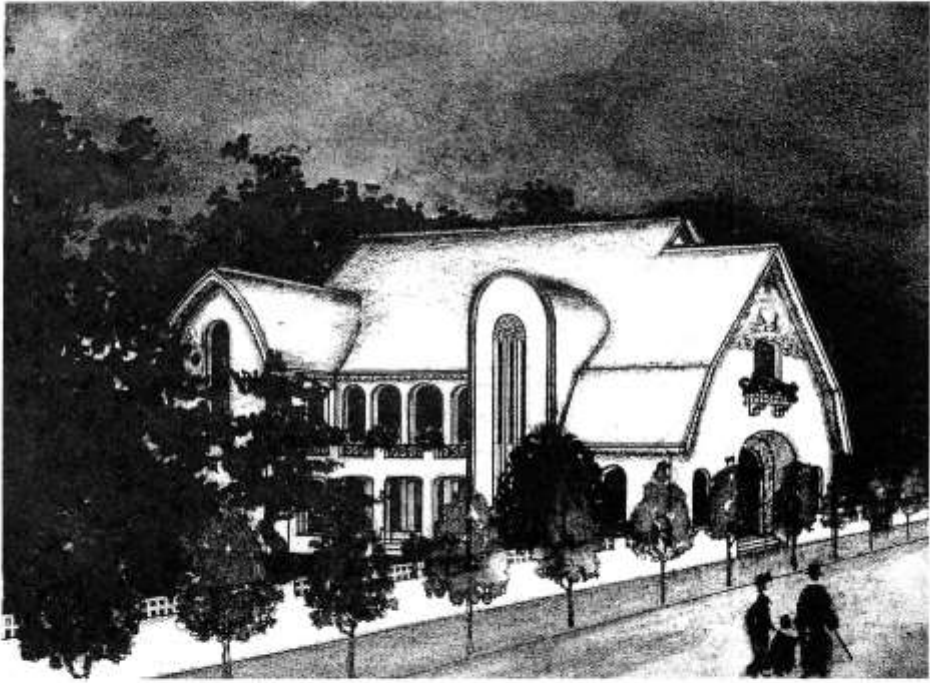
建坪 125.55 二階 40.00 延坪 175.55



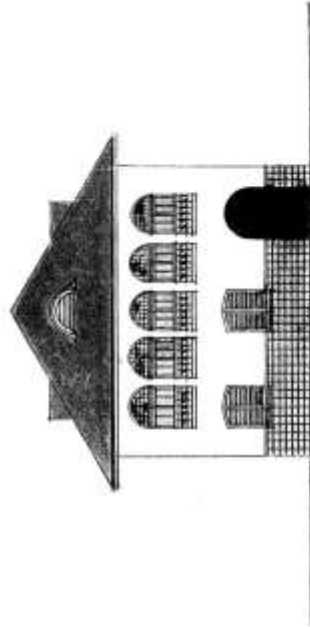
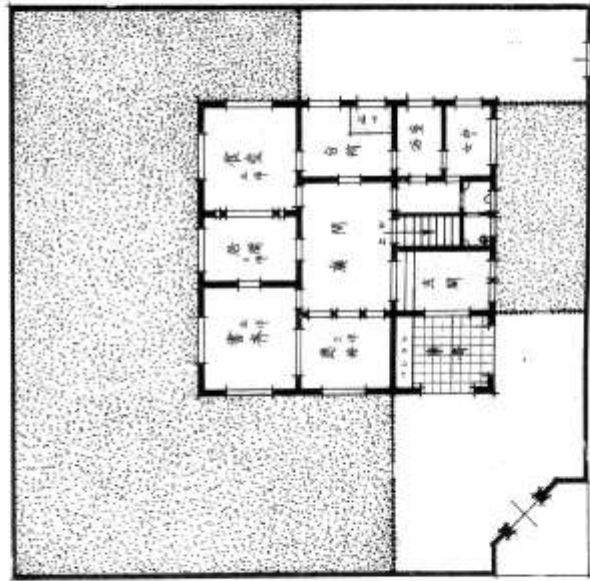
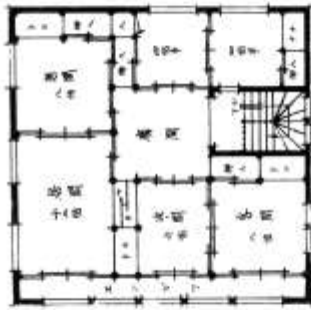


邸宅

建坪 120.5

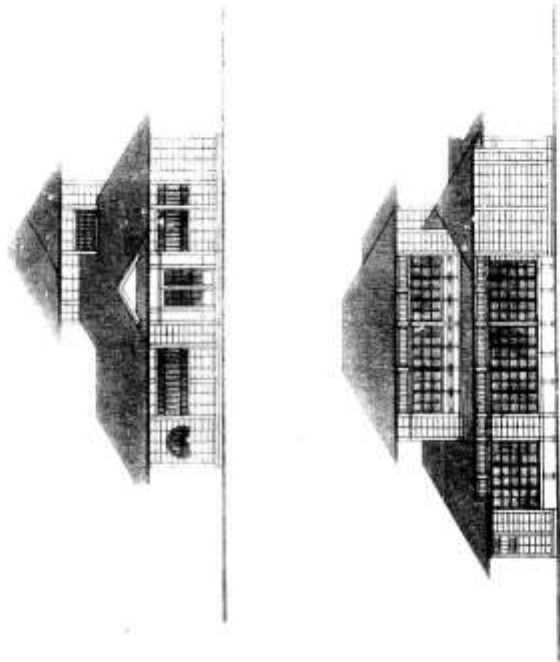
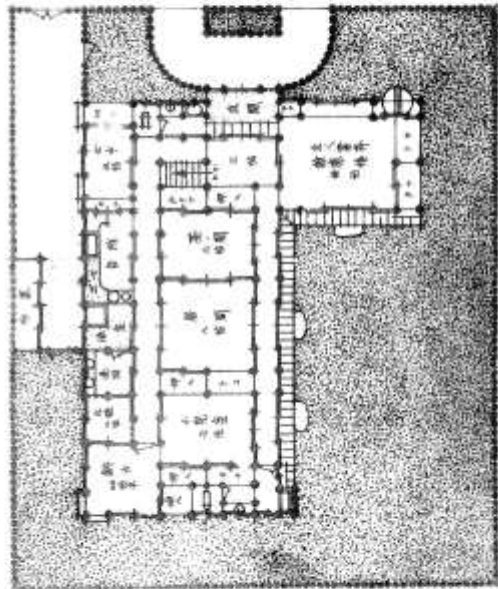
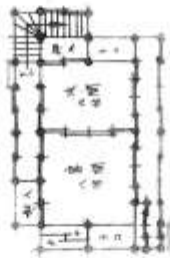


邸宅

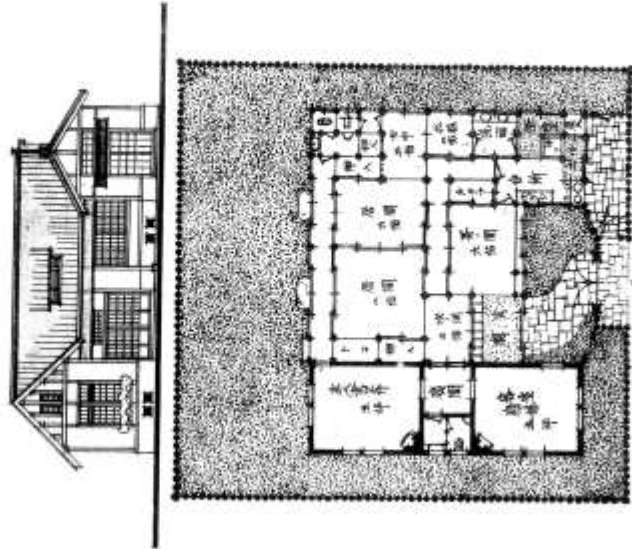
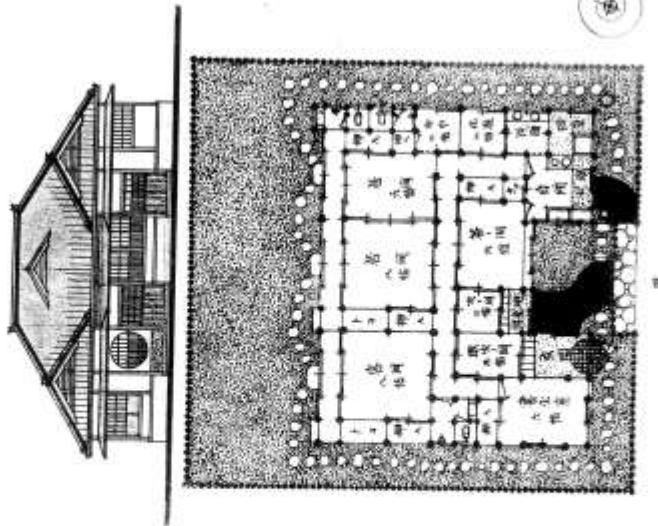


中流住宅  
 面積 30.0 二階 5.0 延坪 77.0

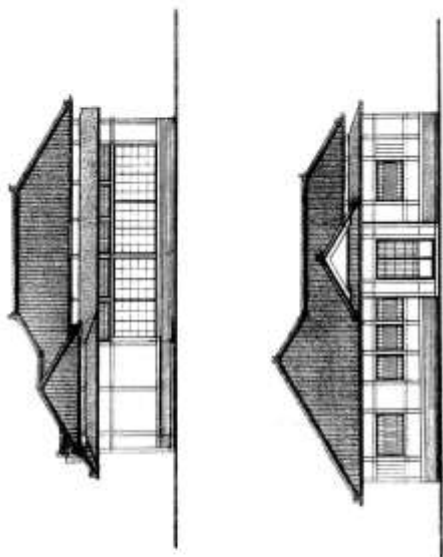
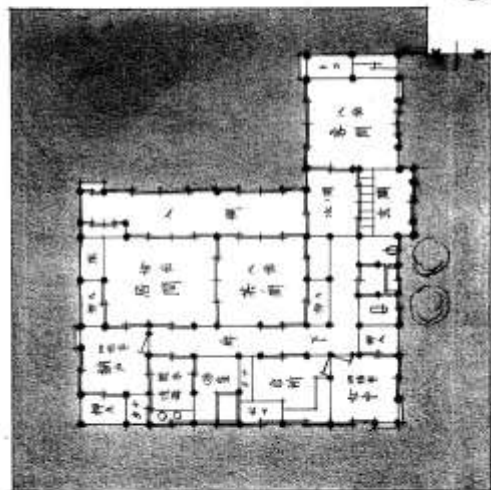




中流住宅  
 東京都 二番町 五軒高

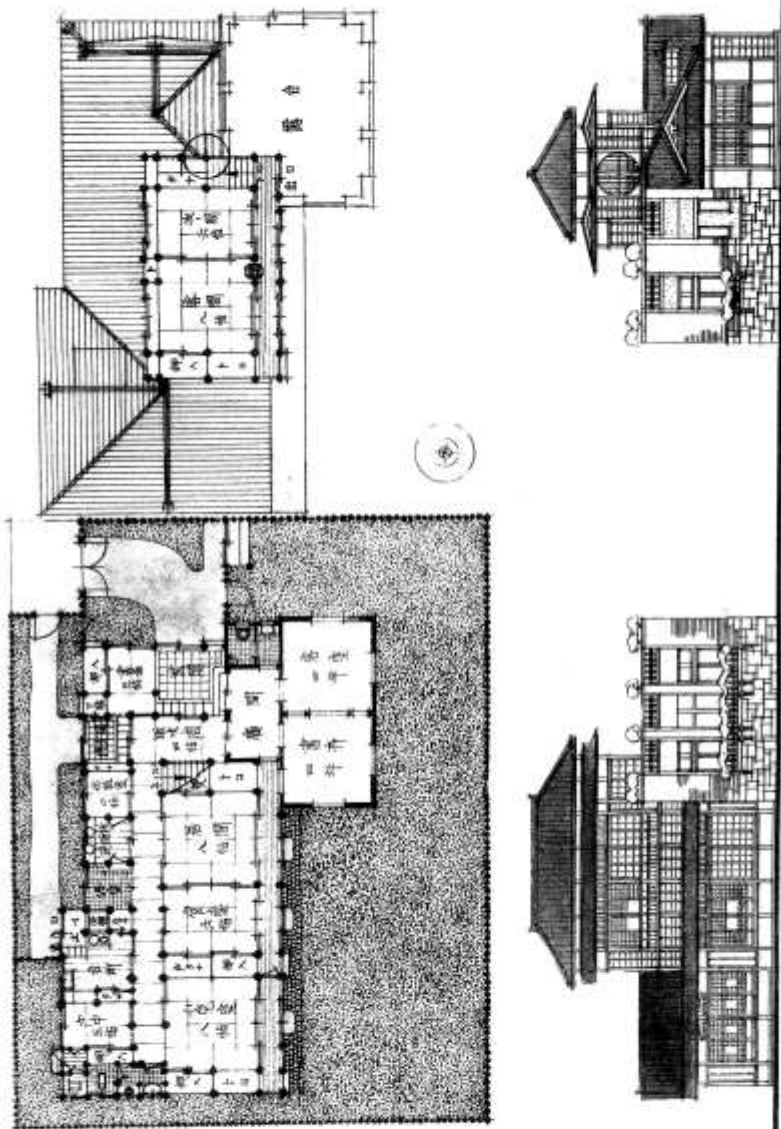


中流住宅  
昭和 甲 1.25 乙 10.75



中流住宅

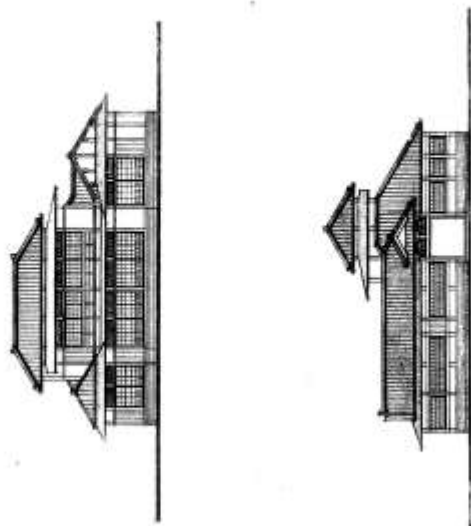
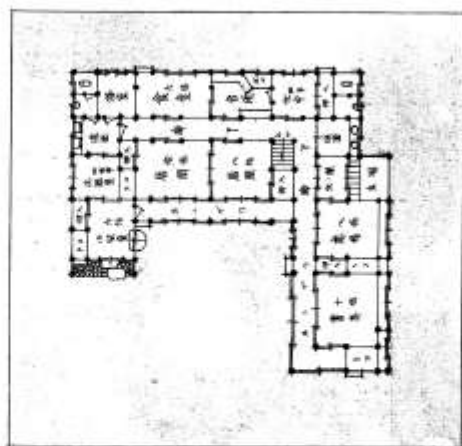
尾形 重信



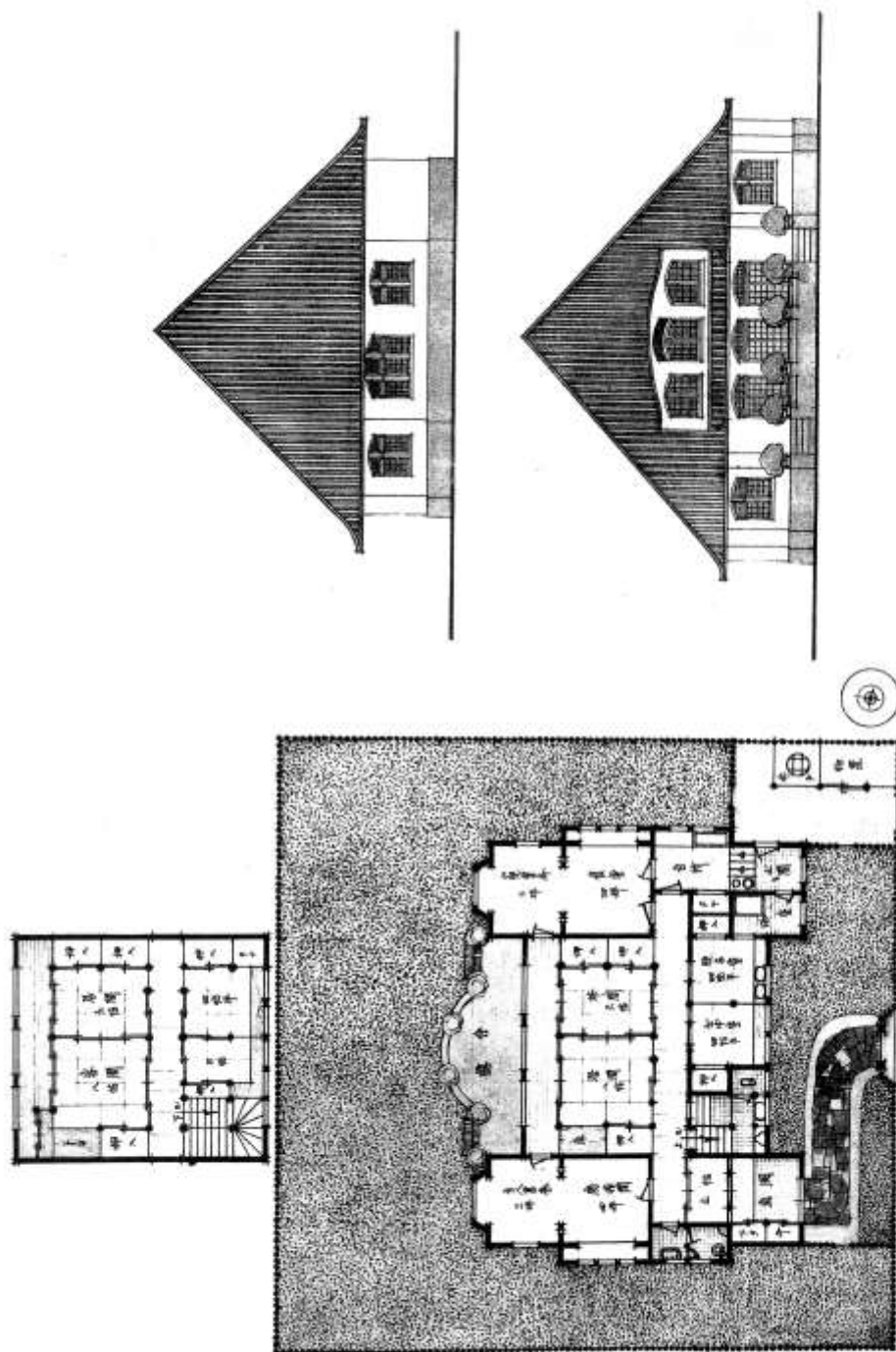
中流住宅

建築家 二宮 忠雄 設計



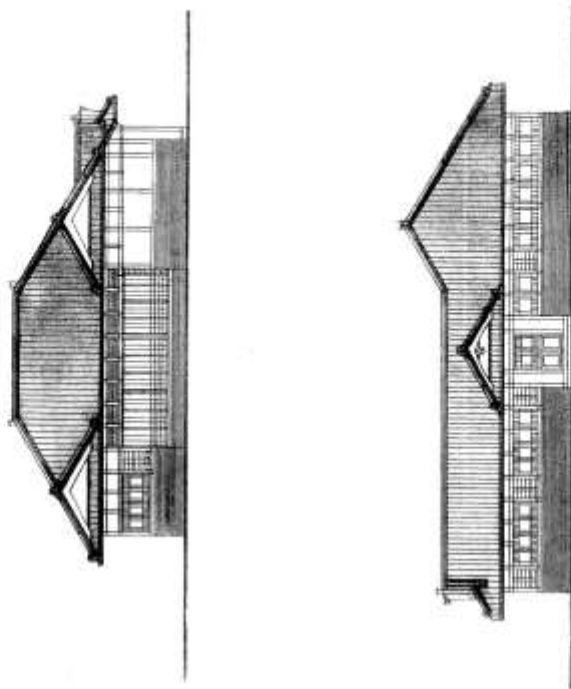
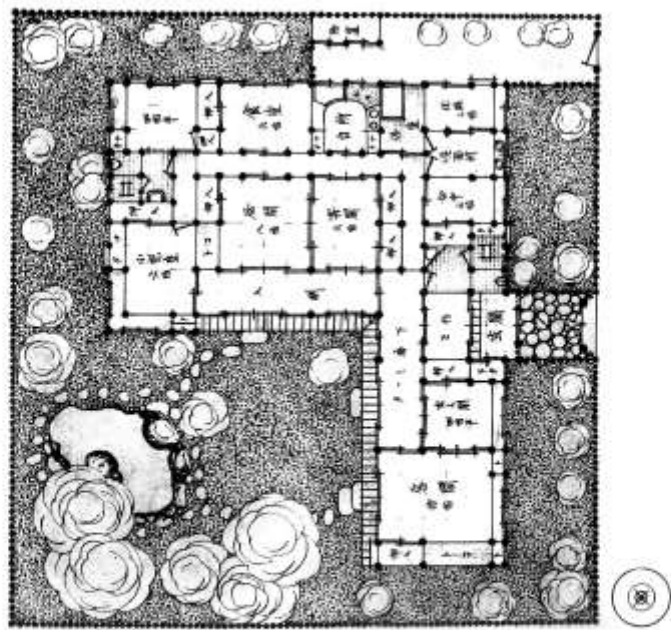


中流住宅  
 設計 坂本 二郎 建築 坂本 二郎



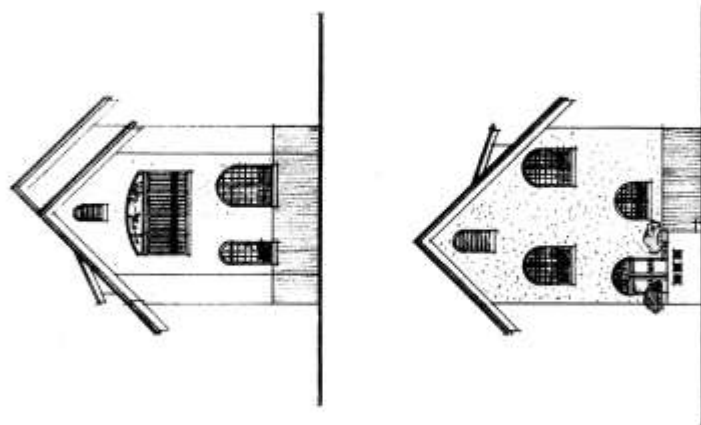
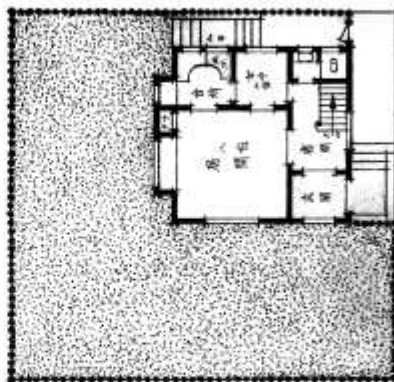
中流住宅

建築士 二階 22.5 坪 1920



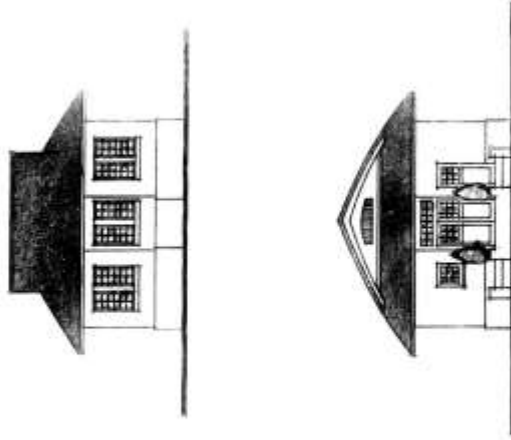
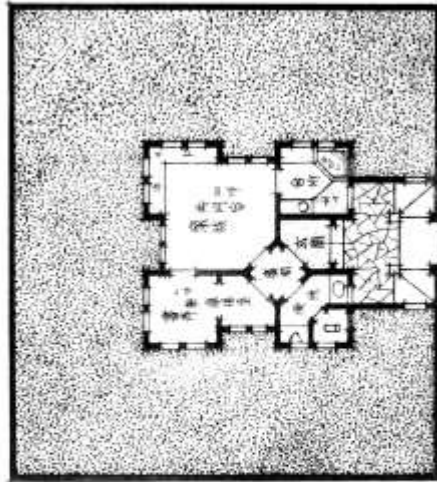
中流住宅

建築士 藤野 野矢



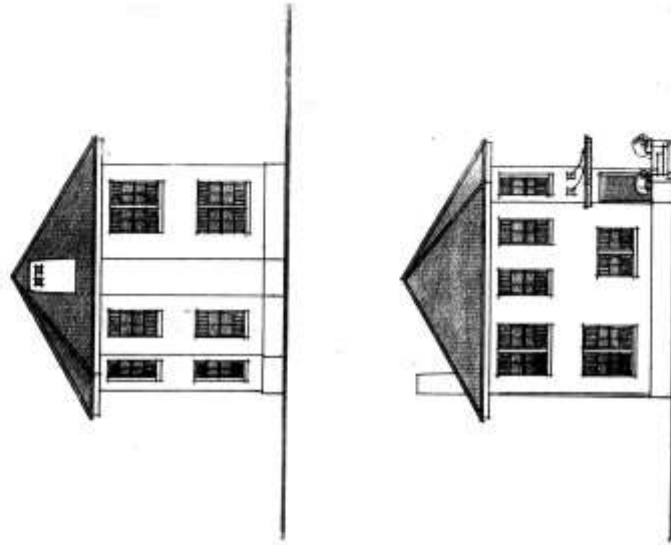
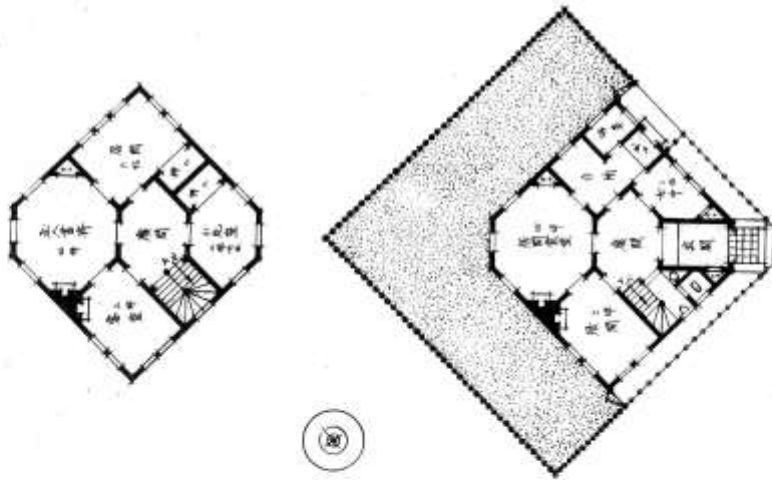
小住宅

図中 25 二階 9.1 延床 11.9



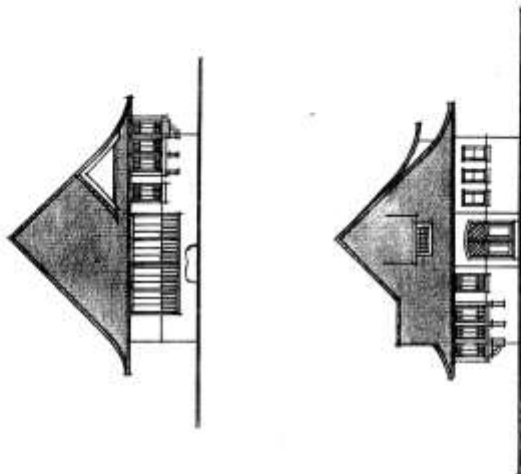
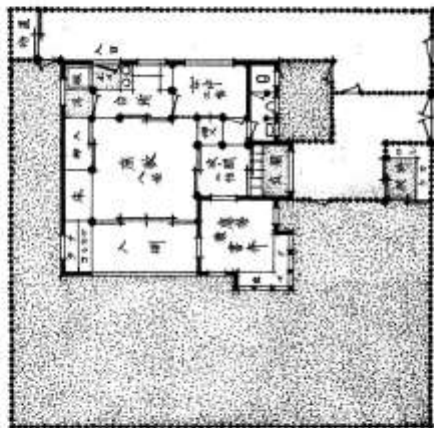
小住宅

設計 11.8



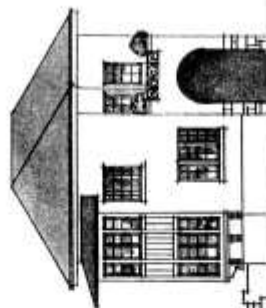
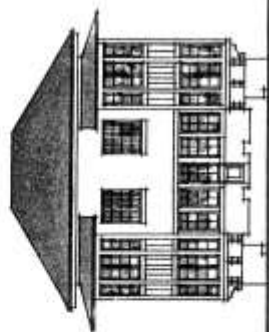
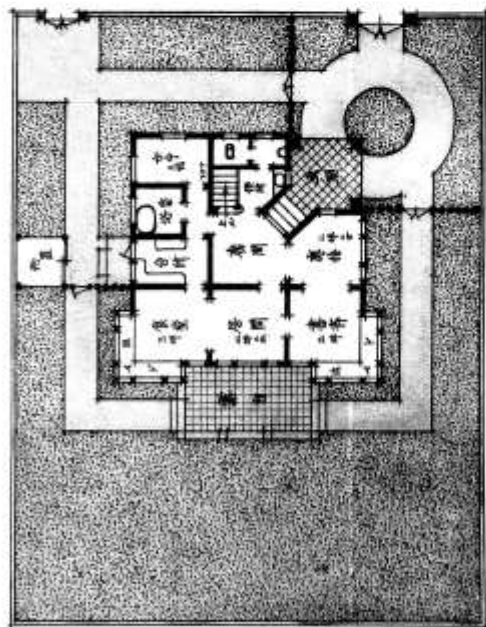
小住宅

建坪 18.5 二階 14.0 延坪 32.5



小住宅

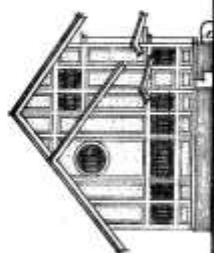
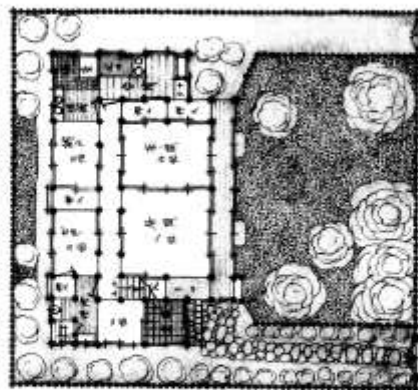
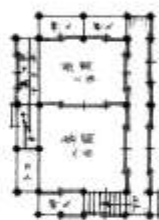
建築士 〇〇〇



小住宅

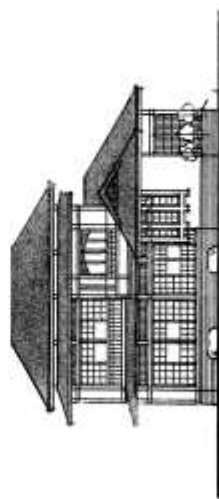
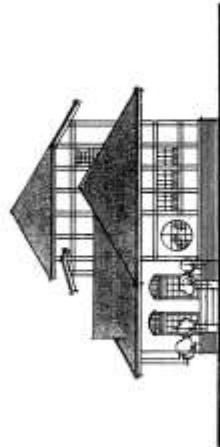
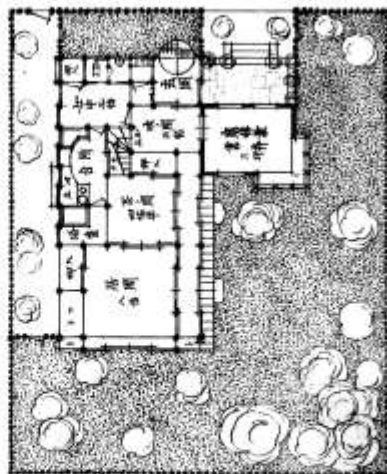
設計者 二階 1/10 建築事務所





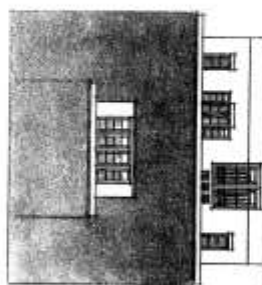
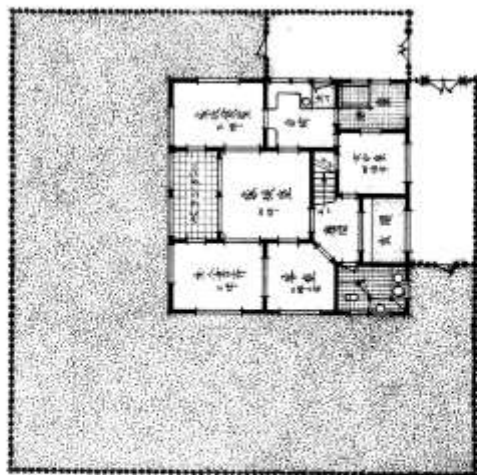
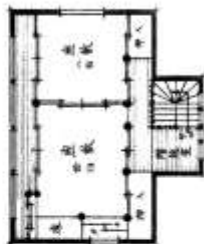
小住宅

建築士(株) 二宮 洋行 建築設計



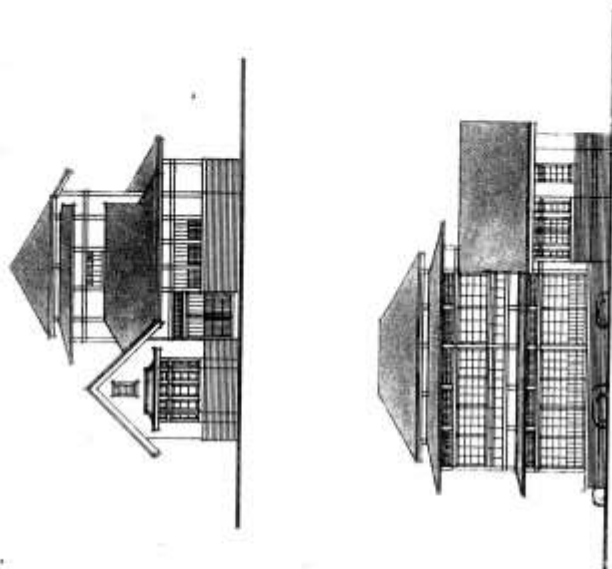
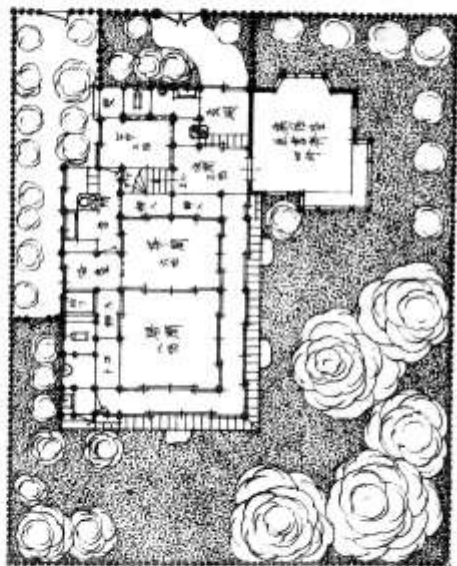
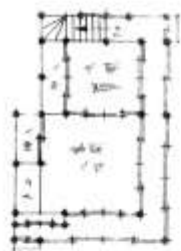
小住宅

建築 2/0 二階 11.0 面積 22.0

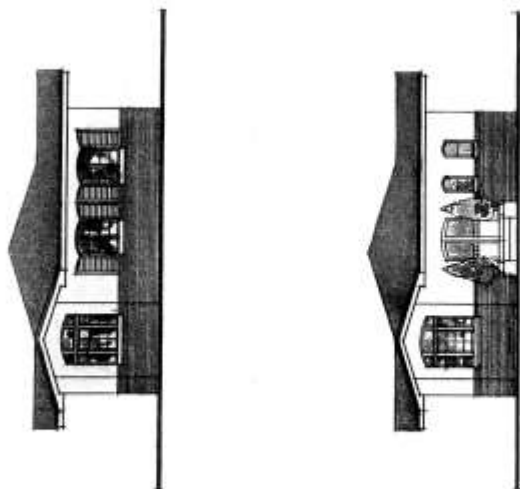
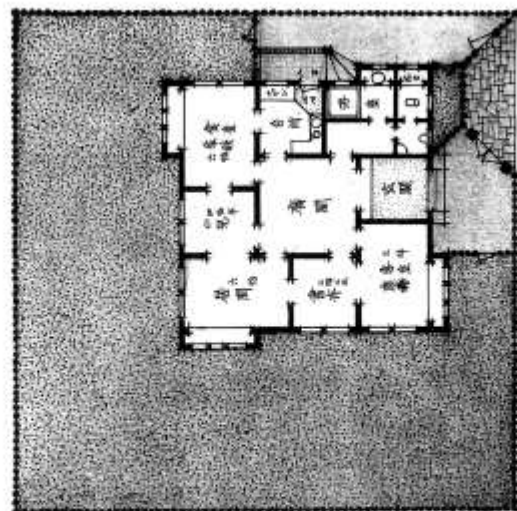


小住宅

北平 1930 二層 17.0 坪 12.0

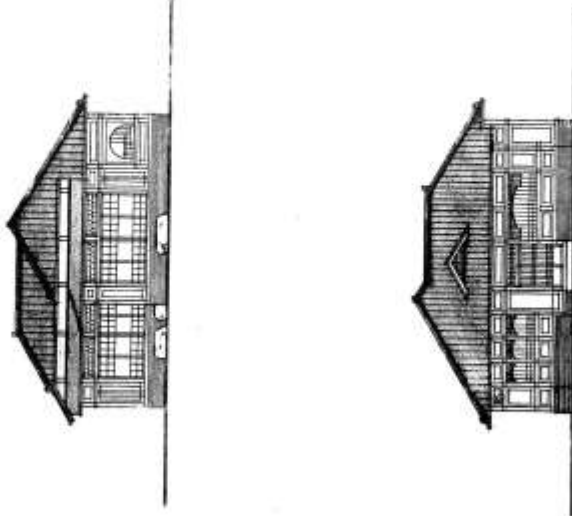
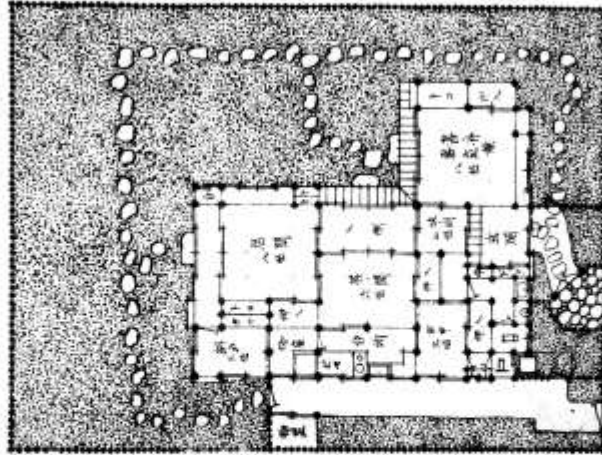


和 小 社 宅  
建築家 小 塚 隆 夫

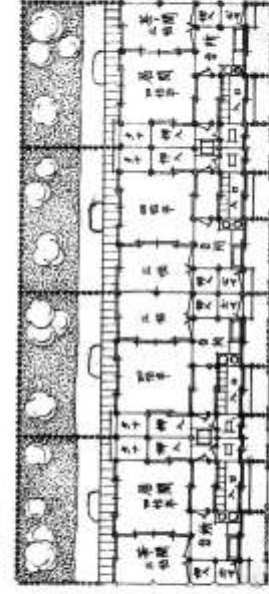
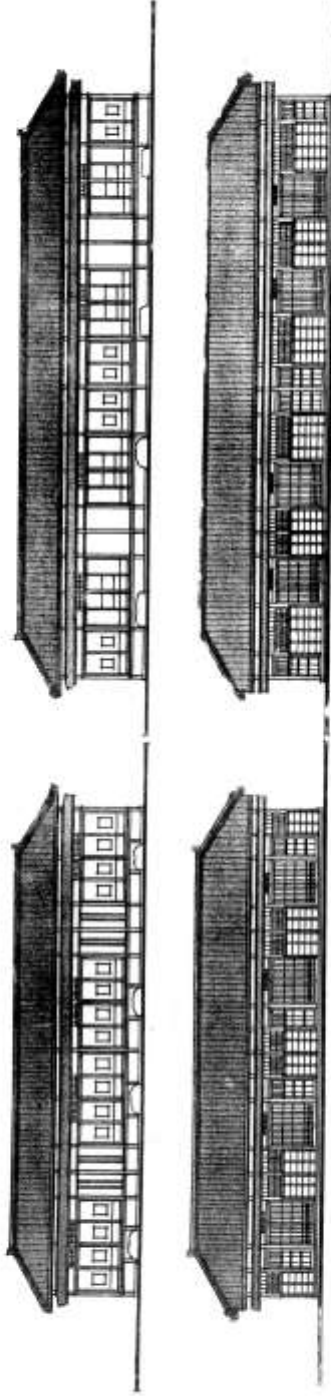


小住宅

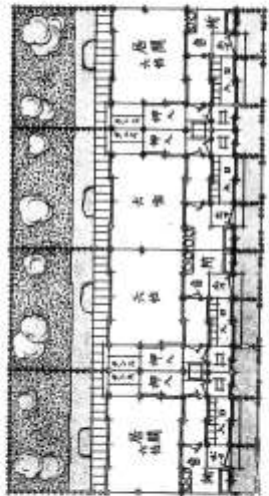
建坪 70.5



小住宅  
図面 270



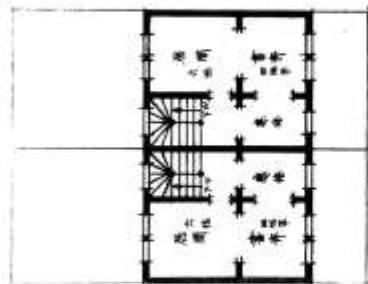
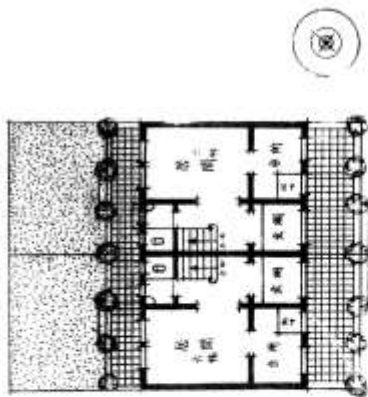
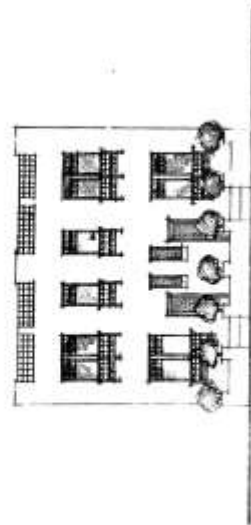
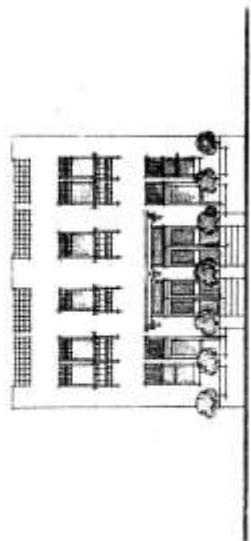
乙



甲

貸住宅

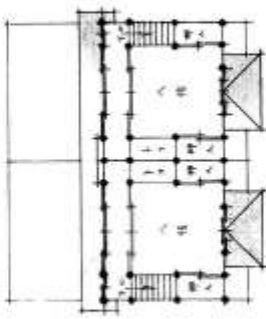
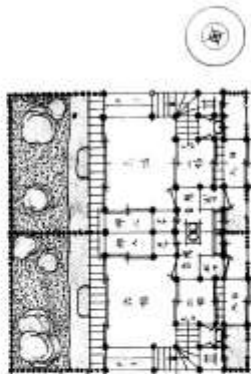
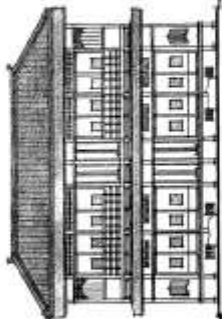
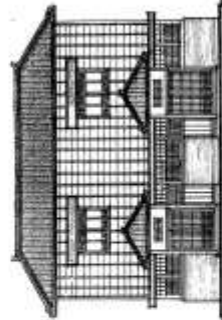
昭和 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸



賃貸住宅

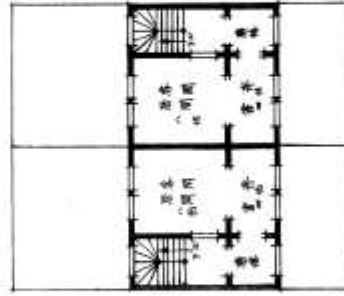
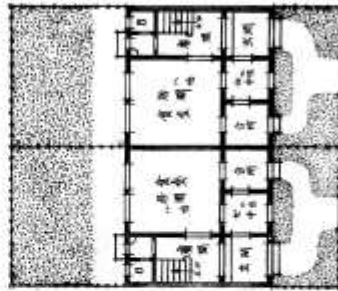
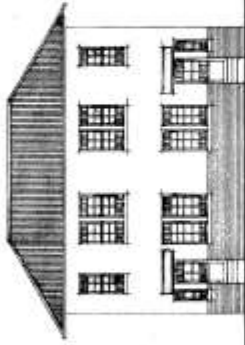
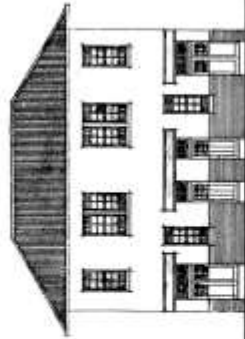
図面 1/20 1/20 1/20





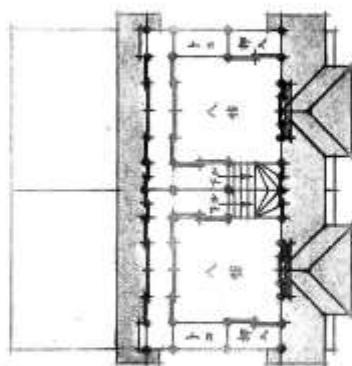
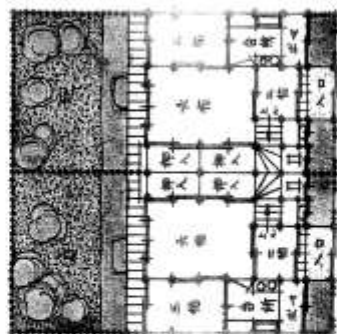
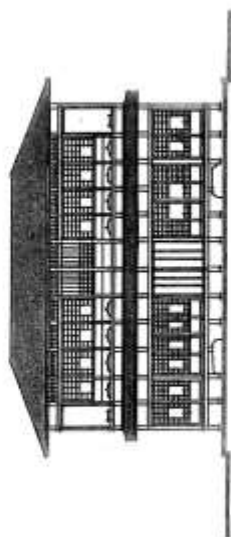
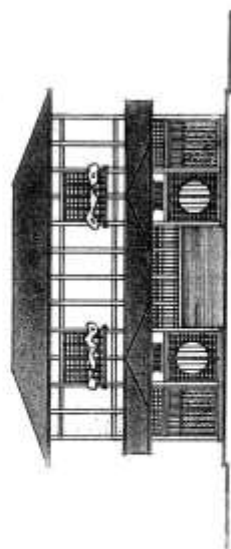
貸住宅

建築士 二階 1.5 坪 11.5



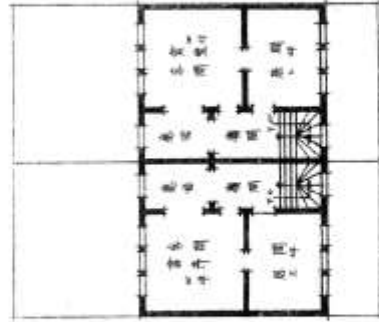
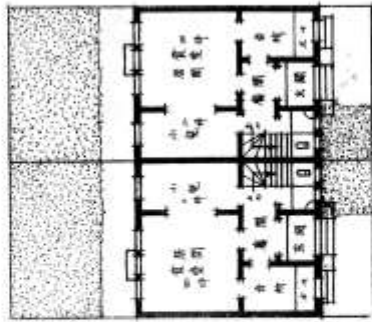
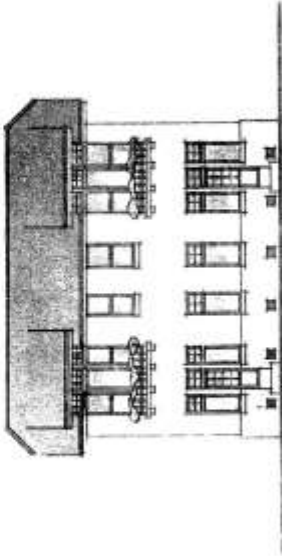
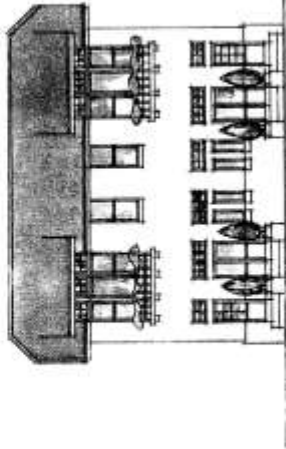
住宅を

昭和九年 二月 二日 第六号



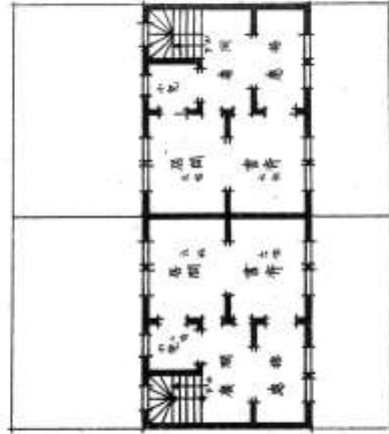
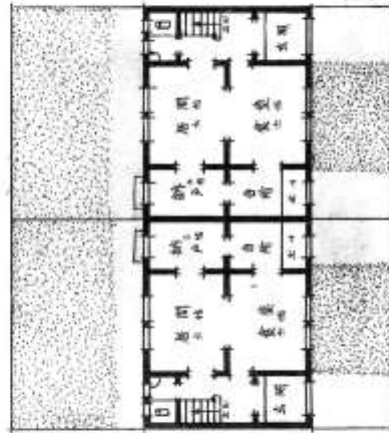
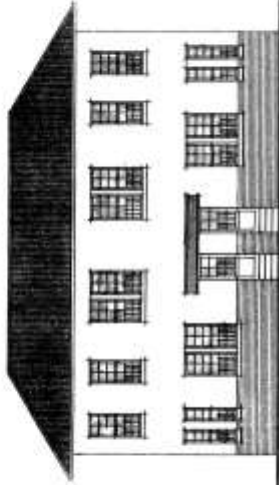
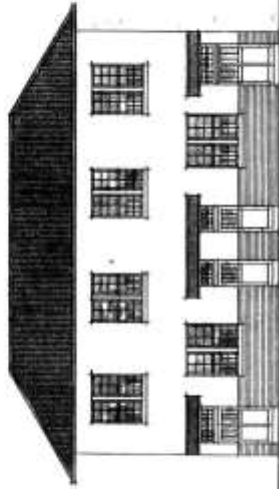
貸住宅

原寸 1:2 二階分 総坪 35.0



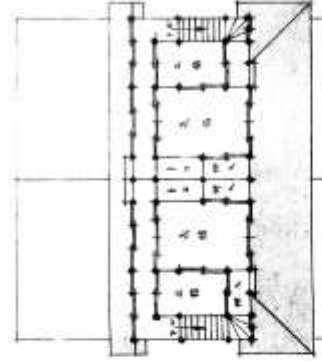
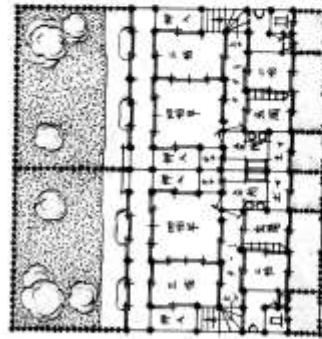
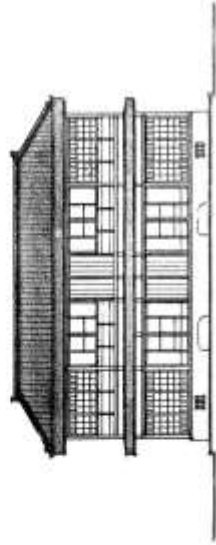
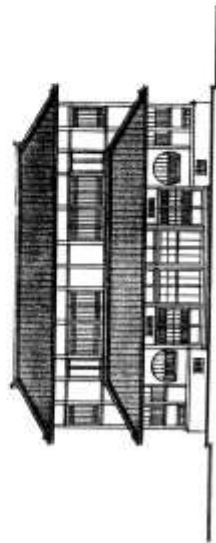
賃貸住宅

設計 10.5 二階 11.0 面積 21.0



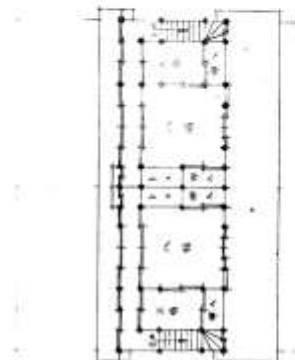
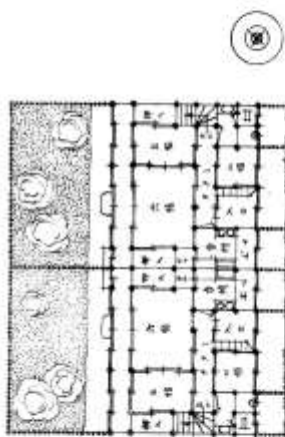
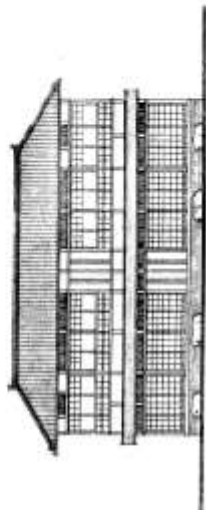
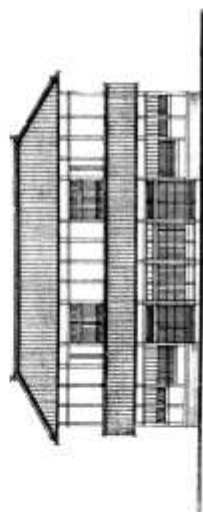
貸住宅

図面119 二階(上) 図面210



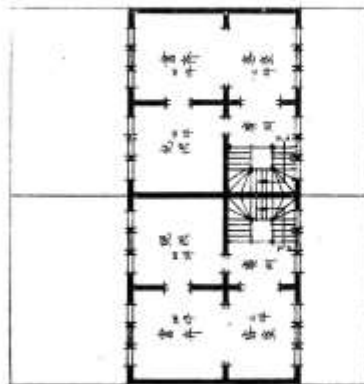
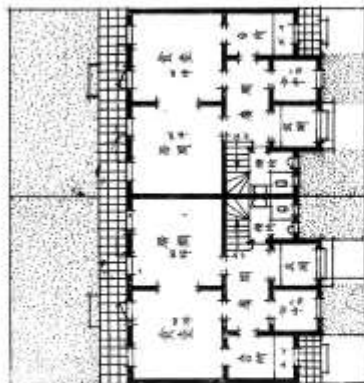
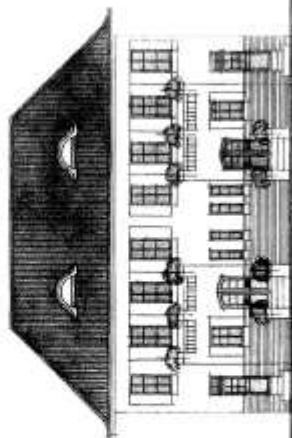
住宅七

建築家 三宅 三郎 昭和 三十四年



図七 住宅

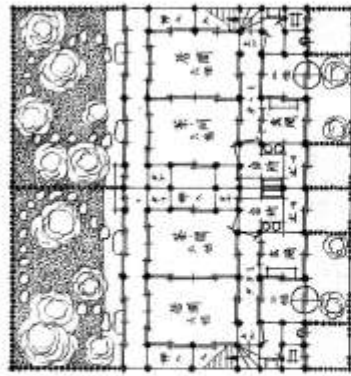
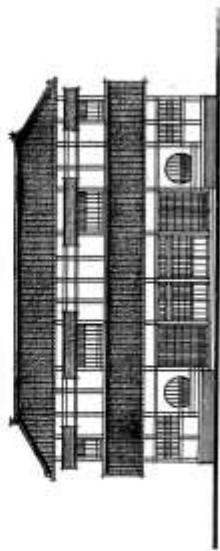
原案 1:100 二階 1/50 建築 2/20



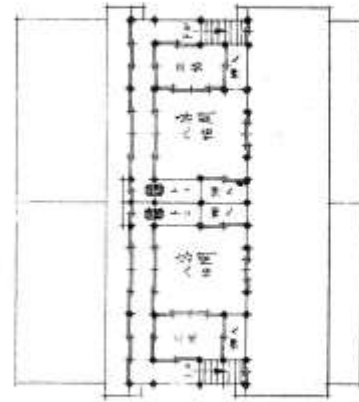
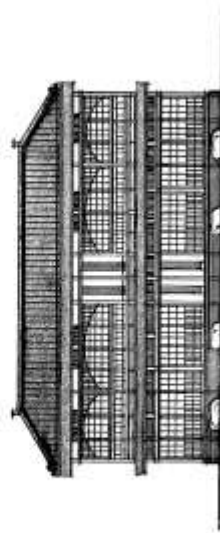
貸住宅

建築110 二層1/1 延床20坪



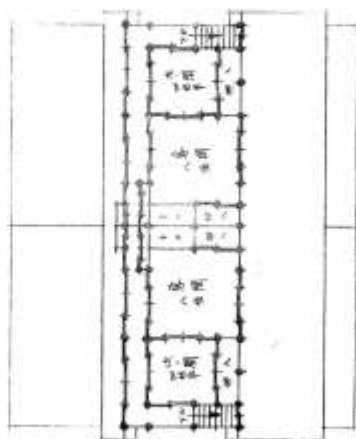
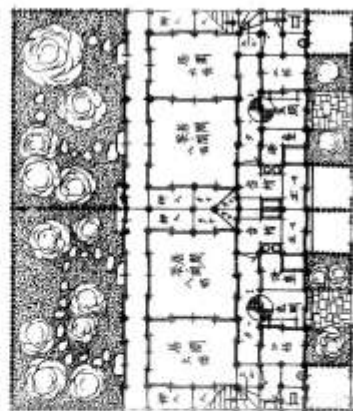
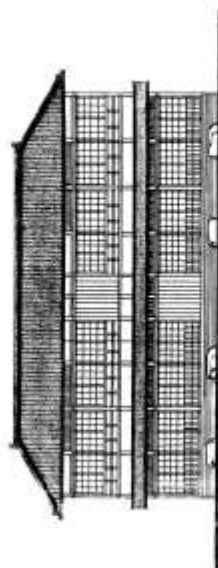
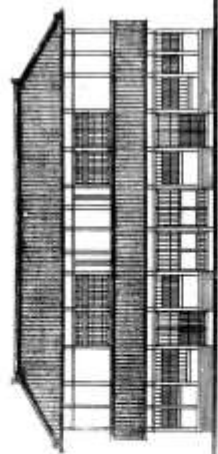


(図)



貸住宅

図中 100 二階 100 面積 214



貸住宅

昭和15年 三月 11日 東京市

大正九年十一月十七日印刷  
 大正九年十一月二十日發行  
 定價 金七圓五拾錢  
 東京市牛込區市谷町九十三番地  
 編輯兼發行者 高梨由太郎  
 東京市牛込區市谷町九十三番地  
 印刷者 高梨由太郎  
 東京市牛込區市谷町九十三番地  
 印刷所 洪洋社 寫眞印刷部  
 發行所 東京市牛込區市谷町九十三番地  
 電話番町一九九五番  
 總發東京二一八二四番  
 大阪市四區京町堀羽子板橋北  
 洪洋社關西代理店 柳々堂書店  
 電話土佐堀二四四〇番

これは大正9年（1920）に洪洋社より刊行された「現代の住宅」を復刻したものである。

本来のサイズは 26.4cm×37.1cm（外箱）で、枠を赤色、図を黒色とした二色刷りであるが、都合により 60%程度に縮小し、黒の単色刷りとしている。（秋田大学附属図書館蔵）

## 【記録】明日の建築会のこれまで（1）

赤野一派

History of ASKEN (1) by Kazuto Akano

「記録」と題する頁では資料性を重視した記事を掲載してゆきたいと思う。今回は、本誌の発行母体である明日の建築会の概略について記す。次回以降は各種の展覧会・イベントの記録を掲載する予定である（編）

### その発端

「何か面白いことがしたいね」—奥山君にそう声を掛けたのは2012年5月26日、軽井沢へと向かうバスの車中でのことであった。私たち103期生は、早稲田大学建築学科恒例の新入生オリエンテーションのため、右も左もわからぬままにバスへ押し込められていた。入学して間もなく、知り合いのいない私は、やむなく隣に座った彼に話しかけたのだ。大型バスの最後列、前から見て左側の席であったと思う。長身でどことなく妖妙な雰囲気漂わせた彼は「カフェがしたい」と言った。飲む側ではなく、お茶を出したり、コーヒーを出したりしたという。世の中には変な人がいるものだと思った。その時は、それだけで終わった。

オリエンテーションの課題が何だったかは覚えていない。何か、小さい装置を提案せよというようなことだったと思う。班ごとに分かれ、古い宿舍の一室で、方針をめぐる徹夜で議論をした。私は、提案には社会性がなければならぬと主張して、ホームレス支援のための移動販売台を提案したのだが、どうも反応はイマイチだった。長時間の議論のあと、結局、班としては、ある女の子が提案した、椅子ともテーブルとも似つかぬ家具を採用することになった。翌朝の講評会で、その案は一等に選ばれ、30cmの金属定規をもらったが、私は自分の意見が反映されていな

いので、やや不服であった。今から思えば、その時の私は全く協調性に欠いた迷惑な奴だったと思う。今なら、提案にはそれなりのユーモアも必要であるということを理解できる。それでも、その時には他の提案の浮薄さだけが目につき、建築にもっと真摯に取り組むべきではないかという思いの方が強かった。

オリエンテーションから帰った勢いで奥山氏を誘ってFacebookグループを立ち上げた（2012年5月29日）。最初の投稿は以下のようなものであった（同日）<sup>47</sup>：

この間のバスの中での話の続きで、とりあえずグループを作ってみた。

何かできたらいいですね。

かなり真面目に、なにかやりたい。

=====

群れるんじゃなく集う。

次へ向かって積極的に行動すること。

各自の探求の場として。考究の場として。

=====

理念？名称とか。

明日の建築会は仮称です。

他のメンバーにあてががあれば。

etc.

奥山氏との議論は6月のはじめまで断続的に続いた。

<sup>47</sup> 以下の引用は、特記なき限りすべて筆者のFacebook

への投稿からである。

不勉強な私には、映画論を駆使する彼の言うところの半分も理解できず、事実上は議論になっていなかったけれど、ここで明日の建築会の大要が決まったという意味では有益なものであった。

思うところ：

パー研にも行ったし、bにも行った。面白いとは思ったし楽しかったけれど、やはりなにか違うと思った。

それは何だろうと考えると、それはイニシアチブがないということなんじゃないかと。そういうサークルというのは、もうすでにある上下関係ができていて、1年が自主的に動くという感じじゃないわけだ。でも、やはりこの分野では、自ら動く・探求するということが重要なわけで、それをサポートする場が必要だろうと。

言い換えると、私はパー研みたいな建築見学集団ではなく、個人の成果物を持ち寄る場としてのグループが欲しい<sup>48</sup>。

やはり建築を極めるといことはどこまでも孤独な作業だと思う。というよりもすべての学問において、勉強は自分でするしかないわけだ。必要なのはbみたいな勉強会じゃなくて、それを発表する場、議論する場だと思う。

つまり、学会みたいなものになればいいと思う。(同日)

## 第1回グループ展「建築の未来、私たちのビジョン」展

ちょうど、この頃、薄暗いキャンパスの中で、ひと際明るくカラフルな看板を見つけた。それは早大西早稲田キャンパスで開催される学園祭である理工展への出展者の募集であった。話を聞くと、出展料を取らないばかりか補

助金をくれるという。渡りに船と参加を決めた。

理工展の参加申込書ももらってきました。何かできたらいいな。

1年の他の人にもそういう話をしているんですが。

例えばこの会で、小冊子を作って頒布するとか、文章や作品を展示するとか、独立宣言書を書くとかできたらいい。(2012年6月6日)

しかし、すぐに明日会が前面に出るのは避けるべきだという考えになった。それは、それまでの議論で、明日会は学究を中心とする少人数のグループとするという話になっており、準備に人数が必要な学園祭への出展とは性格が違ったからだ。

看守的行動<sup>49</sup>で申し訳ないけれど、いろいろな人に声をかけてみて、いろいろ考えましたが、明日の建築会とは切り離れたところで、何十人かあつめてインスタレーションを作るのがいいんじゃないかと思いました。この会では、本当に建築について、あるいは芸術・社会について考える人と深くやったほうがいいですよ。

理工展向けには新たなグループを作って招待します。明日の建築会はそこに参加、あるいは少しまとめる形で。(2012年6月8日)

奥山氏の同意が取れたので、明日会とは別に「理工展を建築学科1年生が勝手に占拠する会」と名付けられたグループが立ち上げられた。ここには、40人程の学生が集まった。「【極秘】理工展占拠計画詳細」と題された文章には次のように目的が記されている。「目標 『移動するKENCHIKU』を製造し、キャンパス全体を縦横無尽に動き回り、理工展を占拠してしまうこと」(同日)。より具体的な計画は以下のようなものであった。

### 【会の理念】

先輩によらず、友達と馴れ合いするのではなくて、

<sup>48</sup> 本記事においては、これから先にも、早稲田に既に存在する建築サークルについての批判的言及があるが、これは当時の個人的見解であって、今の考えや実感とは異なるので、ご容赦いただきたい。

<sup>49</sup> 現代は万人が万人を監視する看守構成社会であり、これが商業主義社会と結びついて、現実味もなく息苦しい社会を作っているというのが、奥山氏の持論だったので、こういう言い回しが出た。

個々人が面白いと思うことを追究する場とすること。

【理工展で何をするか】

・『移動する』建築をつくる

個人もしくは数人のグループで、移動する建築を5つくらいつくる。

【どういうことか】

とりあえず正規の方法で参加を申し込み、補助金を手にいれる。理工展には普通のインスタレーションだと思わせておいて、実は動く建築をつくる。つまり、指定された場所にはとどまらず、あっちこっちにキャンパス内を動きまわる建築をつくる。中庭のあっちこっちに小さな建築がみえて、でも10分後にはまったく違う場所に移動している。ある時は建物の中にたたずんでいる。ある時は戸山公園に移動している。絶えず動き回る、土地に固着しない、建築をつくる。つまり、キャンパス全体を自分たちの展示場にしてしまう。「理工展を勝手に占拠してしまう」。(同日)

当初はそれなりの勢いを持ってスタートした占拠する会であったが、打ち合わせをするごとに人数が減り、遂に参加者は10名以下に落ち込んだ。これは、一重にイデオロギーチックな主張をし続けた私のせいである。特に6月10日に投稿した、本会の目的と意義について15分にわたり長々と喋り続けるビデオは、明らかに失敗であった。後に、あれは皆で聴いて相当笑ったと言われた。

それでも、そんな私に付き合ってくれる人がくれたお蔭で、6月13日の時点において、5つの展示計画が出来た。

議事録

2012年6月13日(水) @早稲田大学 57号館 2階  
18:00~

参加者 7人

建築展へのアンチテーゼ

▼生活する、非日常を演じる

本気でわたしたちは演じる。

▼作るもの：色は赤に統一。象徴として。血？

：そこで生活する

・紐-楊

・歩く住居-落合

・神輿(ゴミでつくる) -奥山

・赤テント(社交場としての) -小塚

・遊具(構造は?危険) -阿部(6月13日小塚)



打ち合わせ風景

これを基に予算が組まれ、審査を通過したが、この会の理念を巡っては依然として議論があった。特にどこまで会としての色を求めていくかがその焦点であった。理念を問うことはせずに、もっと遊びも必要ではないかという意見に対して、私は強硬に理解を求めていた。

理念を省いてしまう、か・・・。今回の理念を達成するためには人数が必要だから、確かに若干遊びに揺れてしまうのは仕方がないかもしれないけれど、人集めのために理念信念がおざなりになるのは本末転倒な気がするなあ。まずは理念信念に共感してくれるように、理解してくれるように努力して、遊びに揺れるのはそれからでもいい気がする。

というよりも、この会の趣旨としてはやっぱり参加者の自主性を最大限発揮させること、個人の意見主張嗜好をそのまま形として立ち上げ、それを集わせるということがあるわけで、そういう意味での積極性は(=理念として)、やっぱり求めていきたいと思う。(6月14日)

私個人としては、「(大学キャンパスを)占拠する」とい

う言い回しは冗談のつもりで用いていたのだけれども、それが不真面目な言葉遊びに見えた人もいたらしい。特にこの前年に Occupy Wall Street という大規模な運動があったこともあって、政治に興味のある人の間では、「占拠」は身近な問題であった。私は政治に疎い人間であるから、当時は全く気にせずにいたけれども、パワーの問題に気を遣う人は、上のような私の態度が癪に障ったとしても当然であろう。

6月17日の時点では、以下のような計画が進められることになっていた。

#### 「建築の未来」展 企画詳細

団体名

正式通称：明日の建築会

裏名称：理工展を建築学科1年生が勝手に占拠する会

企画名

「建築の未来、私たちのビジョン」展-いま、移動すること-

書類上のコンセプト

実寸大の建築模型(インスタレーション)を製作・展示することで、来場者の方に建築、ひいては早大理工の魅力や面白さを伝えます。また、屋外に設置しますので、理工展全体の「華やかさ」の創出に貢献できます。

大きく2つの模型を用意します。これらはいくつかの部分からなり、それぞれ自由に変えられるようになっています。この部分を2つの模型の間で交換し、組み替えていくことで、模型が時間によって全く異なる形、趣を呈するようになっています。

模型が2つあるため、展示は2か所に分けて行いたいと考えています。(その間で部品をやり取りすることで、模型が変化していきます)。つきましてはキャンパス内の少し離れたところ(中庭の対角線上、あるいは中庭と63号館脇など)に2か所場所を頂ければと思います。大きさは3m\*3m くらいのスペースがあればと思いますが、少し小さくてもかまいません。

本当のコンセプト

移動する建築で理工展を占拠してしまえ。行動せよ、主張せよ。建築を我々の手に取り戻せ。「今の建築は大きすぎる」。建築とは何か。建築は誰のためにあるのか。原建築とでもいうべきものがあるとすればそれは何か。建築における歴史性とは？ 一つの方向性をもつこと、移動することによって何が起きるか？ 建築が物理的に動的な存在になると何が起きるか？ 民族になりきろう。それはある信仰をもつということだ。我々は建築を信頼できるだろうか。社会は建築を求めているだろうか。理工展である民族を演じる。一般人の生きる世界とはまったく異なる、しかしあるリアリティを持った民族。来場者はここがどこなのかわからなくなる。そして、彼らの生きざまを見て、今自分が生きている社会の無根拠さに気づくことになるだろう。

各班の提案と、全体の簡単なスケッチ

落合班「個人用移動式住居シェルター」ドーム状の住居。きぐるみのように着て移動する。寒冷地、環境の厳しい民族の住居。東京砂漠を生き延びるためのシェルター。

楊班「一木呂庵」茶室・寝室。転がして移動。ひもによる開放的な空間装置。熱帯アジア・モンスーンの民族。

奥山班「ジャンク(仮)」宗教的シンボル。可動式神殿。粗大ゴミを使う。詳細未定。

小塚班「テント(仮)」我らの拠点？アラブ・中東民族？

阿部班「ジャングルルーム」明快なグリッド・モジュールから派生した遊具。詳細未定。

代表者役職/連絡先

世話人：落合悠斗

副代表：阿部和也

会計：小塚麻優子

広報(映像)：田中杏樹

広報(チラシ制作): 大谷美帆さん (6月17日)

その後、天野彰氏による土をテーマに作品案が加わり6  
班体制となった。各班の詳細は以下のようなものであった。

落合班 企画概要と現状報告(2012.7.9)

概要:

種別: 移動式住居

予定戸数: 6戸

大きさ: 1.5m キューブ

構造: ダンボール造

移動方式: 歩く

キーワード: 移動、シェルター、立体最小限住居、  
東京遊牧少女の包

理念: 都市に住居を持つということ

今日の都市においてはますます多くのサービスが  
提供され、たとえば場所を問わず仕事ができるよう  
になり、一つの場所に定住する意味は次第に薄れつ  
つある。

このような状況下において、究極のねぐらたる最小  
限住居を考えたとき、それは建築を超えて限りなく  
衣服に近づくのではないかと思う。伊東豊雄の「東  
京遊牧少女の包」は一種のテントのような作品だっ  
たが、そこから更に進めて、その存在さえも意識し  
ないほど軽く、そのまま電車でさえ乗り込めるよう  
なもの。自分とほとんど同一化してしまうような存  
在へと変化するのではないか。足を出して、そのま  
ま移動できる住居の姿がそこにある。

すべての機能を外部化していった先に、最後に残る  
住居の機能は、都市の寒さから逃げるためのシェル  
ターであることだろう。それは、本人といくつかの  
所持品——今なら携帯電話といく種かのカード——  
を収容できるものであればいいのだ。

詳細:

枠組みは段ボール(本当は木でやりたかった)、外皮  
は帆布(撥水塗装)、ドア部はベニヤ製を予定。床に穴  
が開いており、そこから足を出して移動する。穴に  
蓋をすれば中で(ぎりぎり)眠れる。

現状:

参加者: 1名(落合君)

準備状況: 未着手

予算: 37045円申請中 今後の活動予定:

10月下旬: 材料買出し

11月: 突貫工事

参加方法:

落合までご連絡ください。

その他コメント:

猫のように、自由気ままに移動する建築です。これ  
を着て中庭を共に占拠しましょう。移動住居は、工  
夫次第で、さらにいろいろなバリエーションができ  
ると思います。(7月9日)

現在の奥山藩の現状。

茅の輪神事、カルロスカルパのプリオンヴェガ墓地、  
この他にもみられる宗教や精神空間における円(環)  
について掘り下げ、空間の象徴にしていく。

理工キャンパスに生きている設定で進めているの  
で、主にキャンパスで廃棄されたものを使っていく。  
現在、粗大ごみ置き場より材料の調達、石島邸に貯  
蓄中。

重量、柔軟さ、心に引っかかるものなどを判断材料  
に収集している。引き続き材料収集を続ける。

この企画の面白いところは、それぞれの感覚で選ん  
だジャンクを組み合わせていくこと。なぜこのジャン  
クを選んだのか、個々で分析し、シェア、その分  
析に見られる理を活かすように立体を構築していく。  
移動について。臨時的に神輿としていたが、分解し、  
その場その場で新しい構造を作ることを思案中。と  
にかく、立てる。不安定だけど強いものを目指す。  
材料次第。

以上 (7月9日 奥山)

天野班

概要: 個々の素材の調和によって、それを動かすこ  
とによって、大衆の心の根底にある通俗的な命(シ  
ンボル)を新たに見出す



種別：

予定戸数：1

大きさ：5～6畳（仮）

構造：未定（様々な材を使う予定）

移動方式：タイヤとキャスター

キーワード：俗っぽさと混沌

理念：世界観の表現を徹底的に追及する

詳細：

現状：デザイン等の仮決定案を推敲中

参加者：天野、鈴木栄三郎、稲葉、菅原

準備状況：移動パーツの購入と手配、

予算：1～2万円

今後の活動予定：より具体的なデザインと必要物資を近日中に決定する。

参加方法：メンバーに話しかけてみる

その他コメント：個性は才能。それに自信を持っていきましょう（7月10日 天野）

この会の理念をめぐる問題は、この間ずっとくすぶり続けていたが、それが表面化したのは、予算について他団体との折衝の必要が生じたときだった。早稲田大学には建築系サークルとして本会以前に建築展、Perspective研究会、b[flat]の三団体が既に存在しており、このうち建築展が最古参のサークルとして、理工展に出展を行っていた。ここに本会が加わることであったために、建築サークルに割り当てられる予算が逼迫したのだった。理工展側の仲立ちで話し合いの場が設けられ、本会の予算を10万円以下で抑えることで決着したが、かなり激しい応酬があった（主に私の責である）。ここで問題となったのは、要するに建築展のような既存の団体に対して、共存をとるか、競争をとるかということであった。これは本会を二分する議論となり、結果として夏季休暇中に赤テントと神輿の話は立ち消えとなった。

会の中で若干歩調が乱れたけれど、まあ、その責任は私にもあるわけだから気にしないでください。小塚さんも会計はやってくれるわけだし。

製作に対する作者のスタンスの問題が出てくるのは、たぶんこの組織がデザインの深い部分に関わることをしようとしているからだと思う。この会の方向性としてただ平和的に学生生活を送るだけじゃ面白くないというのは全員一致するところだろうけれど、だからデモンストレーションであるべきだとなったときに、それを示威行為としてのデモととらえるか、演示という意味でのデモンストレーションととらえるかで、少し認識に行き違いが生じたんだろう。

まあ、私個人としては既存の建築というものに対する演示ぐらいの気持ちでいたんだけど、小塚さんは示威行為だととらえているようだね。誰かを否定するための自己主張は違うというのは、正しいと思うけれど、自己主張の過程で誰かを批判し否定する過程が伴うのは、やむを得ない部分があると思う。建築展の活動も面白い、面白いんだけど、何か違うと感じている部分があるなら、そこで違うと言うことが必要なんじゃないか。

一連の話はそういう意味だったわけだけど・・・少し誤解を招いた部分があるかな。意思疎通は難しいね。

今から小塚さんに作品を（無理やり）作らせるということはするべきではないし、やめるというならそれもいいんだけど、少しの意思疎通の不足でこうなってしまったなら、それは惜しいことではある・・・。

（7月16日 奥山氏とのやりとりの中で）

本来なら夏季休暇中にも集まって活動すべきであるが、なかなか集う機会がなく Facebook 上でのやり取りに終始した。しかしながら、青臭いながら意見の交換があったことは貴重であった。

こんなことを言っただけなのかもしれないが、実をいうと、私は 3.11 以降、建築を信用できない。なんだか、今の建築は仮構の上に仮構を積み上げているだけのような気がするんだ。現実世界がもはや

リアリティーを失っているのに(説明はできないけどそう感じる)、そこに仮構を積み上げる作業にどんな意味があるだろう。理工展で示したいのはそういうことなだけけど…。

建築展のブログによると、彼らは 55 のアトリウムに穴のあいたシートをいっぱい吊るすらしい。

そういうアイデアがでることには敬服するんだけど、それはただのアート止まりなんじゃないか。そういう架空の世界、幻想性を追求するような方向性に、恐れ多くも「建築」の名が使われることが、私はもどかしくて仕方ない。

同じインスタレーションでも、磯崎新の電氣的迷宮は恐怖に満ちた空間だった。電気仕掛けで回転する板は、暴走する機械文明に対する警告だった…というのは深読みかもしれないが、磯崎は仮構の中に現実を感じさせた。

今求められているのは、仮構ではなく実体だ。架構ではなくマッスだ。建築のリアリティーを取り戻さなければ、氏がいう通り、建築は社会から解離してしまう。私はそういうことを理工展で言いたいんだ。

(9月11日)



製作風景

実際に制作物の詳細を詰め始めたのは 10 月に入ってからであった。落合班はそれまでのドーム住居から塔へ変更された。また、天野氏が出展を取りやめ、結局 3 作品の展示となった。場所は早稲田大学西早稲田キャンパスの中庭に一か所、58 号館と 62 号館の脇に一か所を確保していたが、作品数が減ったので使用したのは中庭のみであった。現地での準備は 11 月 1 日より行われた。

塔「光の楽器」は上部に花卉のような翼が 4 枚ついたタワーであり、下で紐を引くことで開閉される楽器である。中庭を事前に借りることは出来なかったので、前日に解体した部材を自家用車にて持ち込み組み立てた。前日深夜、目を離したすきに強風に煽られ倒壊したが、損傷は軽微だったので少し補強するのみで済んだ。理工展期間中はステージの音楽に合わせて翼を開閉し「演奏」した。段ボール製で、全体は 3 部分に分かれ、ゴムの力により展開し、折りたたむことも出来た。数人で持てば別の場所へ移動可能だったが、実際には行われなかった。

コンセプトは次の通り：



光の楽器

なにか展覧会には核となるシンボルが必要だ・・・と昨日から思い初めて、それで、こんなタワーを作ってみよう。

高さは 4m で、底面はおよそ 1m 四方。普段は箱の中にしまえて、フックを外すとゴム仕掛けで展開する。ゴムを外すとふわっと崩れて、すぐに撤収できる。

中庭の森の隅で、お客さんが通る中、ふわっと、突然白い巨塔が立ち上がって、風に微かに揺れて、それからふわっと崩れて、5 分後には跡形もなくなって

いたとしたら、それは狐につままれたような幻想的な体験になるだろう（10月3日）

阿部氏の「ジャングルルーム」と名付けられた作品はスチールパイプによる立体格子である。赤く塗られたチップボードを間に乗せ床とした。規格化された部材によって構成されており、また事前に板を切断するなど準備していたので、組み立ては早く済んだ。



ジャングルルーム

#### 概要

普段「遊具」としか見ていないジャングルジムを建築的な視点から新たな空間として見れないか

種別：様々 1~6人用

予定戸数：1戸

大きさ：1.9m \* 1.9m \* 1.9m以内

構造：パイプによる四角形の集合体

移動方式：回転

キーワード：自遊

#### 理念

小さな4角形を組み合わせることによってできるのは遊具のジャングルジムだけとは限らない。生活の空間を創造できないだろうか。子供によって遊び

方が様々に変わるジャングルジムのように、人によって使い方が様々に変えられる空間を創造できないだろうか。そんな「遊び心」と「自由」がある「自遊」な空間を創造しよう（7月14日 阿部）

楊氏の茶室「曼荼羅庵」は2000m以上のビニール紐を巻くものだったので、かなり時間を要し、最後は一同総がかりであった。赤く塗られた木枠に白い紐が綺麗に映え、秋の日差しのもとで溜息が出るほど美しいものであった。

コンセプトは次の通り：

新テーマは「曼荼羅と密接伝来」

……眼前にあった事物が突然、それまでとは異なる様子に見えることがある。さっきまでは何の変哲のなかったものが、美しいと感じるようになるのだ。こうした経験は多くの人にあると思うのだが、それは一体どのようにして起こるのだろうか。

俗なるモノが聖なるモノに変化する、こういった現象は仏教では、聖性顕現と釈明される。感受する人間の心に、仏の姿が表れたために、秘境が見えるようになったのである。

仏教行者は修行や儀礼を通して、聖性顕現を得たが、その修行や儀礼のうちの一つに曼荼羅がある。

曼荼羅は密教と共に誕生した。それは仏教における諸仏神の相関と世界観を明確に図像化したものであり、そこには幾何学的な規則性に基づいて配置された多種多様な仏神や、宇宙から個々の人間の精神世界まで大小全てが秩序立てられた世界が描かれている。

また曼荼羅は、行者が最高真理を自ら体現する、或は他者へ伝達するための手段でもあった。行者は曼荼羅を心に思い浮かべることで悟りの境地に達し、聖性顕現を得た者はその心の風景を曼荼羅に顕して、まさに悟りを得ようとする者たちへの教法とした。

.....

かつて1人の行者がいた。彼はインドから自国に密教を持ち帰る最中にあった。日中は東を目指してひ

たすら渡り歩き、一日の終わりには木枠を組み立て、そこに糸を張って安息の場とした。糸を張っているうちに彼は糸によって曼荼羅を表現できることを見つけた。彼はさっそく瞑想を始め、悟りを得るとその光景を糸の曼荼羅にした。そうして彼は何種類もの曼荼羅を作り、一つ一つ記録していった。やがて彼の曼荼羅は密教と共にその国に根ざし、以来、人々に聖なる体験をもたらしている。(10月20日 楊)



曼荼羅庵

全体を通して、阿部邸がキャンパス近くに立地していたことは、これらの部材保管や作業上で非常に助けになった。展示は11月3日(土)・4日(日)の二日間にわたって開催され、4日夜に解体廃棄された。廃材の一部は柵・椅子として再利用された。予算は10万円弱確保していたが、使用されたのはその半分程度であった。

なお、本展に向けて「私たちの宣言」と題する文章が編まれたが、外部には公表されなかった。資料としてここに記す。

#### 私たちの宣言

建築は単なる機能や形態ではないことを確認します。建築は人間生活そのものであり、私たちに語りかけ、私たちとともにあるものです。

建築は最早一個の物質ではありません。

建築は一つの人格をもった存在であり、私たちの良き友人なのです。

彼らを生みださんとする私たちは、デザインの根拠を自らの内に持ち、

全人格をもってこれにあたらねばなりません。

それはすなわち、建築と私たち自身を同化させるということです。

ですから、私たちは自信を持って、

吾人が建築であると言いたいと思います。

建築は常に私たちの内にあります。

今日の絶望的なまでの社会的混乱の中にあっても、

しかしこの胸に燃える一片の純真な建築の姿を創出するために

私たちは、静かに行動を開始します。

明日の建築会



曼荼羅庵内部

(未完)

## 雑報

## 成城見学会開催

都市型キャンパスと言えば聞こえはいいが、なんとも無機質極まりない大久保工科大学にも春というものがやってきた。それを伝えるのは一本のサクラ (*Cerasus*) の開花と、教室を求めて彷徨う若いヒト (*Homo sapiens sapiens*、特にオスが多い) の出現が観測されることである。▼明日の建築会としてはこの *freshmen* を確保したいところであるが、公認サークルではないがためにブースを確保することもできず、かといって中庭で待ち構えてピラを配る元気も出ず、特に何も勧誘をしないまま過ごしていた。▼そんなある日、見知らぬ *Twitter* アカウントより、まだお前らは活動しているのかとリプライが飛んできた。聞けば建築学科への新入生であるという。これ幸い、本会の何たるかを知らぬうちに確保すべしと、急遽新人歓迎会を兼ねた見学会を開催することにした。▼場所は吉川清作関連でよく訪れていた成城学園周辺とし、今井兼次・丹下健三・吉川清作・吉田五十八・増沢恂の五人の作品(跡地)を1日で回る強行軍を組んだ。▼決行日は4月19日(日)。参加者は9人であった。早朝集合でまずは今井兼次の成城教会のミサに参加。やはり建物は使われているときが一番いい。とはいえ、明日会一同は基督信者にあらず、作法がわからず始終心労が絶えなかった(恥もかいた)。あまり思い出したくない思い出。▼次に訪れたのは丹下健三のゆかり文化幼稚園。フェンス越しに覗いていたら「何してるのー」と何処からともなく園児数名が駆け寄ってきた。建物を見てるノヨーとは答えたけれど、きっと変に報告されて不審者扱いされているであろう。▼ここで、地元のM氏より、鈴木了二の耕雲寺も見てけとのアドバイスがあったので寄り道。ようやくまともな建築見学風になる。ただ、内部で法事をやっていることを知らず外面を見て大声で話していたのはいささか迷惑だったかしらん。▼寄り道のあとは吉川清作へ。とはいえこちらはウン十年まえに取り壊された跡地。それも二つ(朝日住宅と勝田氏邸)。もはや何もない。1年生に跡地とはなかなかハードですなあ、と某

氏。▼続いて吉田五十八の猪俣邸。事前に予約しておいたはずがファックスが届いておらず怒られる。何かにつけて怒られる明日会である。しかし建物はさすがのもので、身が引き締まるような思いがする。個人的にはここを訪れるのは二回目だったが、私は気づかなかった扉の存在に気付いて何ですかと質問した人がいて(茶室への配膳のための出入口であった)、なるほど複数人で訪れるのもありかもしれないと思った(私は藤森照信信者だから、建築巡礼は一人と決めている)。▼最後に増沢恂の成城大学を見学する予定だったが、日曜のため正門が閉まっており断念。▼まだ日があったので、打上げついでに誰かの家に行こうと、祖師谷のM氏邸まで徒歩で移動。玄関の鍵が開いていたので、驚かしてやろうとこっそり侵入し、ゲームでもするべと *Nintendo64* を起動していたところ、階上から〇〇さあん、〇〇さあんと奇声を発しながら降りてくる数十人の人々が。何かと思ったら、映画の撮影であつたらしい。そういえばM氏が家をロケ用に貸しているから来ちゃダメと言っていたが、すっかり忘れていた。▼勝手に乱入したこちらが悪いにも関わらず、平身低頭で謝る監督さんに非常な申し訳なさを感じながら、駅前のデニーズで打上げらしきをやって、午後6時頃解散した。▼なお、打上げの最中M氏が不機嫌だったので、何かと思って訊くと、映画の一部にヌードシーンが含まれているにも関わらず、事前に断りがなかったのだという。それでバツタリそういうところへ出くわしてしまったらしい。個人的にはまったく羨ましい限りであるが、M氏は人の家で勝手にAV撮るな!とご立腹であった。ゆえに、これを明日会AV撮影事件と呼ぶ。(実際にはAVではないらしいが、しかし氏もまだ完成した映画を見ていないというのだから油断はできない。)

#### 第4回グループ展「だれのための建築？」 開催予定

本会では2012年度より早稲田大学理工学術院の学園祭「理工展」に参加してきたが、本年も満を持して出展する。展示内容は「デコ小屋」「軽トラ」「屋台」の三作である。

▼「デコ小屋」は1年生による作品で、建築そのものというよりも、装飾が主題となっているようである。主だった部分はコンクリートや合板など、比較的 ordinary な材料で構成されるが、室内は生花、小枝などの建築ではちょっと見ない材料で飾られるとの由。小生の昨年の感想では、室内をモノで埋めるのは非常に苦勞があるが、今年度ほどまで出来るか見物である。また、江尻氏曰く本建物に理工展期間中は寝袋を持ち込んで住む由、これも期待が持てる。中庭での宿泊は昨年度小生も挑戦したが、あまりの寒さに途中で退散した(幾人かは成功したが相当な我慢をしたようである)。どうか寒さ対策は万全にしてほしい。▼「軽トラ」は中山氏の作品であり、「現代のキャンプ感覚を問う」というテーマで、荷台を住居に改装したものである。これは理工展のための製作物ではなく、彼が実際に住まっているものである。▼「小屋」は黒沼氏他による作品で、どこぞで拾ってきた年代物の屋台を改装したものである。小生はまだ実見していないが、写真を見る限り相当な物質感があるようである。この改装は相当面白い仕事であろう。▼ところで、誰が起草したのか知らないが、理工展のホームページに掲載された本展の紹介文が小説調の愉快なものになっていたので紹介する。「東京メトロ西早稲田駅は非日常賑わっていた。今日が早稲田祭、理工展が同時開催される11月7日だからかと思っていたが、どうもそういうわけではないらしい。人の流れが、妙だ。私はざわめきの中心を見ようとして中心を覗き込むと、まるでイワシの群れのように、改札口の外側で銀髪の若い男を避けて乗客が通っていく。男は誰かに話しかけようとしているらしい。男は、私が好奇心の目で見つめているのに気づいて、おずおずと近づいてきた。「あ、あの、すみません、今西暦何年ですか？」私はおかしなやつだなあ、と思いつつもケータイで確認し、年月日を口にす。「2015年...やった！成功だ！やっと辿り着いた、〇〇〇が建った年に！」「〇〇〇？」男は大きめに振り向いて見せた。「おや？ご存知ない？そうか、この時代ではまだ...。それでは、明日の建築会もあまり知られていないわけですね...？」この男の物言いは妙に鼻に付く。私はさっさとこ

の男を振り切ってしまうかと思いついた。「明日の建築会も〇〇〇も知りません」「そうですか、では私と一緒に観に行きましょう。あなたもきっと気に入るはずですよ！」男は私の手を掴むと、人の波をモーゼみたいに進んでいく。「ちょっと、困ります、そもそもあなたは誰なんですか」男はニヤッと笑って言った。「怪しいものではありません。私も一人の明日の建築会員です。」▼今年は隣のブースで長年の(個人的)宿敵、建築展が似たような壁状の何かを建てるとの話があり、本会としては負けたくないところである。願わくはその更に隣の芸術学校の展示にも勝って、名実ともに本会が早大理工学部における随一の建築サークルとしての地位を確立したいが、どうなるであろうか。2015年11月7日(土)~8日(日)、早稲田大学西早稲田キャンパス中庭にて。(本展については、後日、赤野一人氏によって報告されるであろうと思う)

### 松木直人氏によるコンクリートワークショップ開催

先のグループ展開催に先立って、コンクリート打設技術を教えるワークショップが、10月4日午前10時30分より57号館地下スタジオ脇にて開かれた。講師には自薦により本会同人である松木直人氏が選ばれたが、講師自ら20分遅刻し、実際の開始は11時近くになってからであった。参加者は江尻悠介、遠田明音、落合悠斗、砂川良太、高野泰幹、豊岡哲生、中山拓也、林誠、本間薫子、増淵加奈子の各氏である。▼ワークショップは型枠をキャンパス内外から探すことから始まり、数十分足らずのうちに、どこに落ちていたとも知れぬさび付いた計器、パイプ、棚、ビニール傘などが集まった。変わったところでは、ナス、カキ、リンゴ、パイナップルの上のほう、殻付きピーナッツ、木の枝も持ち込まれた。型枠は、もともとは一人一つ作るはずだったのだが、中山師範が結構なサイズの作品を作り始めたがために、特に何を作りたいという希望も夢も持たぬ人々(私含む)は、そちらの手伝いをする事として、あとはビニールホース、竹筒、食器棚などの小さな型枠が二三用意された。▼かくして1回目のコンクリート練り

(60kg)が始まったのであるが、誰も砂が湿っていたことに気付かず、水を堂々と投入したがために、前代未聞の流動性を誇る生コンが誕生した。セメントを足してみるも状況は好転せず、かといって捨てるわけにもいかず、結局そのままで幾つか打設をした。型枠の隙間から水が漏れて一同を不安にさせたが、これはどのような影響があるかわからない(本稿執筆時点ではまだ脱型していない)。でも、これは練習だから、失敗してもマアよかろうということになった。余ったコンクリートを利用して、ナス(野菜のナス)を埋めた板も製造された。このナス筋コンクリートの意図と効用については、製造者担当者に聞かねばわからない。▼2回目のコンクリート練り(30kg)は、前回の反省を踏まえ慎重に水を加えたので堅練りの良質なものが出来た。いよいよ中山師範の型に混凝土を入れるのであるが、師範の作品は空中打設工法なる特殊工法を採用しているので、投入は一同総がかりであった。途中、混凝土がやや足りなくなるも、なんとか無事に空中にぶら下がるパイナップルと、鳥の巣が打設された。▼その他、江尻氏の持ち込んだラバー製のラッコにも打設をした。氏曰く、これをキャンパスの壁に貼るのだそうである。完成した暁には、無機質で名高い理工キャンパスにつかの間の癒しをもたらす存在となろう。▼同様に松木講師が持ち込んだビニール傘にも、打設を試みたが、こちらは強度不足からビニールが破れてしまった。冷静に考えれば当たり前であるけれど、薄くやれば大丈夫な気もしていたのも事実である。こういうことはやってみなければわからない。▼今回のワークショップは全般に講師師範らがやりたいことをやるという風が強く、他の参加者諸氏には面白くなかったかもしれないが、まあ、コンクリートの練り方の大要は伝わったであろうと思う。一つ扱える素材が増えるだけでも、創作の多様性は増すので、これを機に色々試みてほしいと思う。▼もし希望があれば今度は樹脂教室もやるよと松木講師。考えてみれば、師範講師ら今回参加してくれた諸氏のうち半数は、卒論提出が間近に迫っている身にも関わらず、時間を割いて来てくれたのである。この上ない喜びであり、友情温厚を感じて嬉しかったが、これで留年しても当方は

責任をとりかねる。

## 御寄稿のお願い

本誌は皆様からの御寄稿により成り立っている雑誌です。どうぞ原稿をお寄せください。本誌は「建築都市文化史」と銘打っておりますが、これは幅広い人間の営みを対象とするという意味であり、建築に限らず、より広い範囲を対象としています。使用言語は日本語を基本としますが、英語・西語その他でも構いません。主な分類としては、論考、批評、記録、雑記、作品などがあります。テキスト以外の写真・イラスト・漫画などのグラフィックも歓迎します。寄稿された原稿の著作権は著者に帰属しますが、CC-BY-ND-NCライセンスが付与されます(ご要望があれば除外することもできます)。

ご協力頂けるかたは、是非一度本誌編集部へご連絡下さい。

## 定期購読のお願い

本誌にご興味をお持ちの方は、ぜひ定期購読をお願い致します。定期購読に申し込まれますと、以下のようなメリットがあります。

- ・本誌編集会議への御招待(Facebook 上での編集会議にご参加いただけます)

- ・バックナンバーおよび最新号 PDF の事前無料配布(本誌はオープンアクセスジャーナルであり、インターネット上で無料閲覧できますが、冊子版との時間差(エンバゴ)を設けております。定期購読者の皆様は、未公開の PDF ファイルにも冊子配布と同時にアクセスいただけます)

- ・御寄稿の優先掲載(皆様からの御寄稿は、本誌編集会議にて掲載巻号を決めておりますが、定期購読者の方からの御寄稿があれば出来る限り優先いたします)購読料は3号 2040円、6号 4070円(送料含む)です。なお、早稲田大学西早稲田キャンパス・東京大学本郷キャンパスでの手渡しを御希望される場合は、送料不要です。皆様のご期待に添えるような良質で資料性に富んだ記事を掲載できるよう努力してまいりますので、ご協力のほど

お願い致します。

## 次号予告

フォトワーク 木村巧 / 吉川清作と乞食の家(2) 落合悠斗 / 稲門建築ライブラリー懇親会報告 / 第一逸脱速度展報告 尾上篤 / 明日の建築会のこれまで(2) 赤野一人 / 本会からのお知らせ

## 編集後記

本誌をお買い上げいただきありがとうございます。編集助手の赤野です。明日会小史と雑記の執筆も担当しています。明日会の実際の活動には、諸事情により参加できていませんが、雑誌の方には時折顔を出したいと思いますのでどうぞよろしくお願い致します。今号は創刊号ということで、張り切って吉川清作の「現代の住宅」を復刻収載しました。大正期住宅改良運動の初期に発行された稀観本ですので、色々参考になるかと思えます。もっとも、これだけのページを刷るとモノクロとはいえ赤字ですので、次号以降は40ページくらいの、だいぶ薄い本になります。すみませ

ん。いつか、発行部数が増えて、採算に乗るようになれば、もっとページを増やしていきたいと思います。(あかの思えば、明日会の内部で冊子をつくらうという話が出たのは、第1回グループ展が終わった直後であった。その頃から、記録に残さないといけないという意識はあったけれど、特に吉川清作の研究を始めてから、その思いは強くなった。史学徒というのは、本来的にそういう人間なのだと思う。ところで、読者諸賢が今号の内容を概観すると、明日会の話が多くて辟易されるかもしれない。これは、原稿の割り振りに不首尾があって、執筆者が身内だけになってしまっただけで、もともとはもっと多様な文章が載る筈であった。次号以降は、その方針に基づいて、原稿を各方面にお願いしてあるので、もう少し建築都市文化史誌としての彩りが出てくるであろうと思う。不定期刊と銘打っているが、前金を頂いていることもあるので、出来る限りペースを上げて、出来れば季刊くらいで発行したい。よろしくお待ち願いたい。編集の経過については、編集会議 (Facebook group)、Twitter(@asunokenchiku)、HPの進捗状況表などでお知らせする予定。(おちあい)

---

建築都市文化史誌 aft 第1号 (不定期刊)

発行日：2015年11月1日

発行人：落合悠斗

発行所：明日の建築会

〒248-0034 神奈川県鎌倉市津西1丁目3番5号

電話：050-3746-9540

メール：asunokenchiku@yahoo.co.jp

ウェブサイト：<https://sites.google.com/site/aftkenchiku/>

Twitter：@asunokenchiku

印刷所：株式会社栄光

Print ISSN 2189-5600

頒布定価：500円



---

本誌は Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 (CC-BY-ND-NC) ライセンスのもとで、自由に複写・複製していただけます(表紙, 17-69頁を除く)